# 人生感恩

岡五朝述

始

特231
851

# 人生愚感

岡五朗述

# 人生愚感目次

## 第一篇　人の心天の心


一　人の心……一〇
二　一歩前の反省……一二
三　狐の話……三四
四　大石の夢……四二
五　働く者の明朗さ……四五
六　眞剣……四八
七　相撲精神……五二
八　良心の力……五五
九　その時の十錢が今贈る一圓より尊い……五八
一〇　自我創造の雜感……六二
一一　日本精神……六二
一二　日の丸の旗の思出……六三

一三　國際反逆者たる勿れ……六六
一四　協和の力……六九
一五　教化愚感……七二

第二篇

一　隨感隨想……七五
二　拳闘……七八
三　百合の花……八〇
四　受刑者の愛國心……八二
五　自由に就いて……八三
六　夏の山……八六
七　人力の驚異……八七
八　常陸丸遭難の思出……八九
九　向上の進路……九〇
一〇　大亞細亞聯盟の結成……九一
一一　滿洲移民……九二
一二　向上の過程……九五
一三　祖國を思ふ心……九八
一四　模倣文明……一〇一
一五　愛國少女と非常時……一〇三
一六　火亦涼……一〇六
一七　武藤元帥を悼む……一〇七
一八　アジア青年聯盟……一〇九
一九　滿洲事變記念日……一一〇
二〇　防空演習感……一一二
二一　汗の苦學生……一一四
二二　十年前の九月一日を憶ふ……一一六
二三　南米へ海外へ……一一七
二四　秋宵雜感……一一八
二五　收穫の秋……
二六　努力の人々……

二七　長谷川君のこと……一一九
二八　名月に題す……二〇
二九　野球リーグ戰……二一
三〇　兒童の心境……二二
三一　外人の見た日本……二六
三二　明治節に際し……二八
三三　國民精神作興……三一
三四　田耕の人……三四
三五　親子の情……三五
三六　愛の心……三七
三七　歳末隨感……三九
三八　年頭所感……四一
三九　皇太子殿下御降誕……四四
四〇　梅花を讃ふ……四七
四一　忠犬に教へられて……一四八



四二　高千穗の靈峯に寄せて……一四九
四三　聖恩無窮……一五二
四四　以て範とすべき庭瀨氏の奮闘……一五四
四五　滿洲帝國を祝して……一五七
四六　春の流……一五八
四七　『友鶴』殉死者を憶ふ……一五九
四八　青年日本を讃ふ……一六一
四九　日米修交八十年……一六二
五〇　老火の番の殉職……一六五
五一　旅……一六七
五二　櫻の花……一七〇
五三　再びハチ公のこと……一七一
五四　靖國神社に參拜して……一七三
五五　師の愛は麗し……一七五
五六　尊き悲壯の犧牲……一七六

目次をはり

五七　雜感……〔一七八〕
五八　噫東郷元帥……〔一八一〕



# 第一篇　人の心天の心

# 人生愚感

## 第一篇　人の心　天の心

### 人の心

#### 一

櫻の花は絢爛として咲いてゐる。美しいではないか。然しながらこれを眺むる人々の心々によつて、そして又場所と時とによつて各々異ならねばならぬ。今若し牢獄に繋る不幸な人が見る花と、心に一つの雲影なき人が見る花とが同じ一本の櫻の花だとしたならば、誰か此の二者の花を眺むる心を同一視出來ようか。

物象を眺むる心、その心が美しい時には反映する物も美であるが、醜惡な心の主が眺むれば同じ物でも醜く見える。

『酒なくて何の己れが櫻かな』と云ふ川柳がある。上戸が花見を諷刺してゐる丈の意味だけではない。我々の心を酒に譬へたものだとも云へるではないか。見る人の心の儘に映るのだから美しく眺むる人もあらうし、悲しく見る者も居ようし、或は又化け物に見る人間もあらうではないか。

良心と云ふものが誰にでもある。心理學的な意味でなくとも、普通一般的な意義での良心、自ら顧みる心、もつと簡單に云へば眞心のことであるが…それは如何なる種類、如何なる階級の人にでもあるものだ。

人間の若さだとか、美しさとか云ふものは時と共に流れて行く。小野小町が何時までも今日の小町でゐられなかつた。クレオパトラも亦何時までも美しい若い女でゐられなかつたであらう。されば小町は

花の色はうつりにけりな徒らに
我身よにふるながめせしまに



とかこつ日が來たのだつた。

僞善の心、虛榮の心、惡の心が一生懸命働いてゐる時でも此の時胸底深く姿をかくしてゐる善の心、正しい心がある筈である。それを私が謂ふところの眞心と云ふ。人生五十年の歷史を顧みて一切の清算をして死んで行く時の姿は、良心の表れた時である。肉は落ち血は涸れて昔の若さ、そして美しさ、或は醜い心、それらは只或時の誇りか迷ひに過ぎなかつた。最後の巖頭に立つて顧みる心の姿、肉體と生命を同じくしてゐるものは只々良心である。

リンカーンだつたかワシントンであつたか或は誰だつたかは忘れたが、惡いことをした度毎に、柱に一本づゝの釘を打つことにしてゐた。又善いことをした時には一本づゝこれを拔くことにしてゐた。善行に心がけて悉くの釘を拔くことが出來た。然しながら只殘つてゐるものは其の打たれた釘の痕跡だつた。此の痕跡を見て、惱む心は何であらうか。垢は石鹼で洗ひ落すことが出來る。布は一度づゝ質が變じて行くのではないか。けれど

我が心は洗ふ毎に美しくなるばかりだ。

## 二

求めて止まぬものは人の心の平和である。

陽光うらゝかに、春のなごやかさに似た心で暮したいと思はぬ人はなからう。が然し心の平和は他動的に強ひられても出來ぬ。人間の心理生活は、社會的に倫理道德の正しさを理解するものゝ外に、內面的に無限の力を求めてゐるものだ。『溺れんとする者藁をも摑む』と云ふ言葉がある。理窟で此の言葉の解釋は出來ないではないか。

トルストイは、現實的福祉の存せざる限り宗教の意義がないと云つた。未來は極樂でも地獄でもない。今日の福祉を求むることでなければならぬ、とさう思ひさうなことだ。然しそれはトルストイの大きい誤りだと私は思つてゐる。現にトルストイ自身が娘のソフアイヤーと村の一番仲のよかつた百姓と、そして自分の身體を一番よく知つてゐる醫者とで



山へ逃げた話……自分の抱負は到底現實性のないものだと云ふ矛盾の苦みから逃れたくつて……そして四度自殺をしかけたさうだ。

今日よりも明日の日に祝福をかけて生きて行くと云ふ人の心は、物數的に幸福の比例量を增さうと云ふものゝ外に超然たる心願である。

地位とか富とか云ふものは、自分一人の占有でないと云ふ考へを持つてゐたトルストイは大きい認識の不足があつた。自分の財產も貧しき人々への贈物にもしたがそんなものは限りのあるものだ。一錢を與へられた者は一錢だけの幸福を感じたらうが、自說に撞著矛盾を知つて彼は破れたのであつた。であるから一錢の富ではなく一つの心の富が人を幸福にして行くものである。

心の富は何を意味するか、滿足もあらうけれど信仰的心理の發動である。神佛を求むる心は富である。印象的生活の必要を私が叫びたい所以もそこにある。

人は自然を通じ、又は人を通じて現象以上の神秘に觸れることがあるものだ。月は六合

に普く光つてゐる一つの事實に過ぎなからうが、その淡い月光を仰ぎて見て人の心は千々に動いて行く。天文學者が月の世界の物理的檢討をしてゐることは自ら此の場合と異なつてゐる。中空に懸つた月を通じて無限の神秘にうたるゝことがあるとすれば、その心は何か、人間の力以上のもの、無限に藏されてゐる不可解な秘密、その力は又無限なものである。

此の時只一個の月を通じて受くる印象に崇高なものがある。その印象は色々に人生を暗示した例は澤山あつた。科學萬能の世界にあつても、科學界の範疇外に何かしら尙求めてゐる心の動搖があるものだ。

## 三

印象的生活に就いて考へた私が、今マルチン・ルーテルの話を書いて見ようと思つた。宗教改革で有名なマルチン・ルーテルは、どうして宗教家になつたのだかと云ふことである。マルチン・ルーテルが何故宗教家になつたかと云ふことより、人間の心的生活は自然又は人を通じて受くる印象に如何に支配されるものであるか、その印象の生活は如何に人生に意義を齎すものであるかと云ふことを知りたい爲の一事例に過ぎない。

ルーテルは一法律學徒であつた。大學に入つて專念に法律を勉强してゐたのだつた。人類社會の規範たる法律それを勉强することに於て理想としてゐた。

或夏の一日の出來事である。彼は親友と二人で都塵を避けてフイルジナンドの郊外に働いてゐた父を訪問した。夏の山々の雄大な姿、綠の色に包まれた勇壯な姿、潑剌たる意氣を示してゐる夏の美、心から偉なるかなと叫びたかつた。溪谷からは涼風が流れて來た。一日樂しく自然の姿に恍惚として、夕方彼は再び父と別れて都へ歸るのだつた。

何時か西の山の端に突立樣に出た眞黑な雲があつた。その雲は見る〳〵大きく擴つて流れて行つた。間もなく天を覆うて終つた。間もなく烈しい雷鳴が始つた。矢のやうに稻妻が地上へ光つて行く數條を見た。呆然として眺めてゐた。雨は沛然として降つて來た。その

時である。耳がガンとしたと思ふ間もなく自分は其場に昏倒した。それから數分は過ぎたのだらう、ふと目を醒すと側に友人が黑こげになつて斃れてゐるのを見た。

ルーテルは愕然とした。力の限り友の名を呼び續けた。然し友は絶命してゐた。ルーテルは悲しみと云ふよりは此の不可思議な力に驚いた。今まで手をとつて語り來たつた友は、數刻の後に死んで終つた。ルーテルは此の急變に爲すことを知らなかつた。洗はれた山も木も新しい香を放つてゐた。太陽は山々へ大きく夕近い反映を投げてゐた。ルーテルは慄然として神秘の力に驚いた。

『自分は何千萬の人々の爲の法律を勉強することよりも、此の偉大なる神秘に就いて仕へねばならぬ』ルーテルは法律家たることを中止した。然も彼は此の自然の印象を受けて、彼の宗教改革を斷行し得たる人となつたのである。

私共の印象生活に、尠からず人生への或暗示を與へてゐる例は、獨りルーテルの場合に限つてはゐない。心の琴線に何かしら共鳴するものがある時に、印象は強く殘る。共鳴する何かしらの印象は種々ある。

## 四

偉人傑士の傳記を讀んで、その人を通じて受くる深い印象もある。物を通じ人を通じて受くる印象、その何れであつてもよいことだ。印象の生活に生きたいものだと思ふ。何故であるかと云へば、私共は之等の印象によつて大きな暗示を受くることがあるからである。

私が所謂印象的生活を物語りたい所以は、圓滿なる人間性への動向を密かに知りたいからに外ならぬ。人間性への動向、我も人も平和な人生を送りたい心願、虛僞も僞善もない世界に生活したい……と希うてゐる。

人生の歷史は旅のやうなものだ。然もその旅は今日よりも明日に、より良き大きい望をかけての旅である。昨日の我と顧みて、今日は更に仕合に、そして明日には又一層の幸福

を祈つてゐる筈である。

宿命的に人生を觀察することは反對だ。ショウペンハウエルが云つてゐることがある。

即ち

『我々の一呼吸は人生の墓場へ向つて行く進軍喇叭に過ぎぬ』

と。淋しい考へ方ではなからうか。私はこれと全然反對に考へてゐる。

我々の一呼吸は人生理想の都への進軍喇叭である……と。

人は理想へ向つて進んで行かねばならぬ。今日よりも明日へ……今年よりも明年へ……

否一生を……理想に向つて生きねばならぬ。

中世紀に此の人生觀を知らした物語りを思ひ出した。三人の若人がゐた。彼等は理想の都へ旅を志したのである。幾年かは過ぎた。けれども理想の都は發見出來なかつた。

或日のことであつた。一人の老人に會つた。見れば此の白髮の老人も旅の姿をしてゐた。老人は若人達を顧みて問ふた。

『君達は何處までの旅をしてゐるのか。』

『理想の都へ旅を志して來たものだ。』

『ホヽ、それは又おなつかしいことである。實は私も君達と同樣、理想の都へ旅をしてゐる者だよ。だが、まだ發見が出來ない。私は三足の銑のわらぢを穿き終つて、御覽なさい四足目のも、もう破れかゝつてゐる。私は君達のやうに若かつた時に旅へ出たのだ。それがもうこんなに白髮になつた……幾十年の旅を續けて來たが、理想の都へは仲々着けさうもない。』

『一體どうなることでせうか。』

と、三人は問ふのであつた。

『永遠へ……理想の都へは永遠の旅だ。さあ參りませう。』

かう云つて老人はとぼ〳〵と又旅へ出て行つた。

この物語は何を私たちに教へてゐることか、私は深く考へさせらるるところのものが

ある。

人間の一生は、誰でもが明日への希望と理想とを抱きつゝ、今日の旅をして生きて行くものだと云ふことを……永遠なる理想の都へ志してゐる老人の言葉を借りて言はしめてゐる。

## 五

私は芝居を見てよく泣く。小説を見て涙を流したり怒つたりもする。或人に批評されたことがあつた。『君は安價な涙を流す。』と、果してさう云ふことになるのだらうか。

私はこんなことを考へたことがあつた。心の琴線に觸るゝまゝに芝居を見て泣くことの出來る人であつて欲しい、と。人の不幸や悲劇を私は好んで批評することがよいことだと思つてゐない。安價な涙だと云はれようが、その人の不幸や悲劇に同情して見ることの出來る自分を感謝してゐる。

芝居を見て劇評的知識を養成しようとは思はない私である。そのことは別個の意味から不必要だと云ふのではない。只自分の心に映じた感情を卒直に表現してゐるに過ぎない。それだけのことである。然しこの平凡な感情が如何に自分の心を淨化したかと云ふ事實、不幸な人に泣き、惡人を憫みる筋書通りの芝居を見て、劇中の人に沒し入ることが、決して私を後悔さしてゐない。否私は私と同感の人の多いことを望んでゐる。

つけたりの話になるが、私の故郷に一人の無賴漢がゐた。此の男の半生は流石に不幸であつた。早くに妻に死別して、その頃から自暴自棄な生活に入つて行つた。彼に一人の子供がゐた。妻を失つた彼は當然此の子を男手によつて育てなければならなかつた。けれども彼は明け暮れの酒に浸つてゐた爲に、たつた一人の子供を顧みる良心さへ失つたかのやうであつた。子供は彼の酒代を働かねばならなかつた。停車場のある町へ三里、十一か二の少年が父への酒代を働かねばならなかつた爲に、重い荷車を挽いて駄賃をかせいでゐた。儲けの金が少なかつた日には、父の爲に折檻せられ生傷の絶えるいとまもなかつた位であ

つた。

けれども彼の子は不平を知らなかつた。自分の力の足りないことを悲しむことがあつたとて、父へ一言の不平を述べたことを聞かなかつた。町へ灯のとぼされる頃に漸やく仕事を終へて、車の手入を忘れて酒屋へ走つて行つた。何時もの壜へ一杯買つて毎晩のやうに父へ差上ぐる喜び樣、町の人々は只々感心してゐるばかりであつた。

秋の鎭守の祭日のことであつた。此の男は珍しく芝居小屋の中に見えてゐた。その日の外題は何と云つたか忘れたが、恰も彼の現實を芝居に仕組んだやうな筋だつた。只彼と異なるは後妻が一枚加つてゐて夫婦二人で孝行息子を苦しめると云ふのだつた。勿論父はまことの父の良心を喚起し、妻を離婚して一生父子水入らずの樂しい生活をすると云ふのだつた。觀衆は子供の孝心に嗚咽した。

その時將にその際舞臺の一端に舞上つた男がゐた。酒にも醉うてゐる樣子だ。それよりも驚いたことには、この男こそ例の無賴漢だ。『芝居を止めい！　俺や惡い。濟ないこつた。』かう叫んで泣いてゐるではないか。これで芝居は滅茶々々だつた。

けれど我等は一つ大なる收穫を得た。その日から彼は酒を絶つた。翌日から子供の荷車の先引をしてゐる彼を見た。彼の心、酒にまどはされてゐた此の男の良心、滚然として正しき心の再生を見て、私はひそかに感じたことがある。

## 六

神も佛もないと云つてゐる人がゐる。そんなものがあるならば見せて貰ひたいと云つたりして——然しさう考へてゐる人は不幸だとは思はないか。

人間の力以上の或強い力に縋つてゐるやうな心持ちになると云ふことは、人の歩みに正しさと眞劍さを伴ふものだ。

私はずつと以前のこと、或寺へ說教を聞きに行つたことがある。何かしら求めたかつた。お坊さんの話を聞いて見たくなつたのだつた。それもまだ若い學生の頃のことである。

佛を念ずる心とは何かと云ふ話しをして居た。

日露戰爭最中であつた頃、畏れ多くも　天皇陛下には戰傷兵御慰問の爲に、或宮殿下を勅遣遊ばされたのである。

或日、特に殿下の御仰せがあり御巡回御日程を變更遊ばされ、突然遼陽の野戰病院に御成り遊ばさるゝことになつた。遼陽の病院は全く御行程外のところであつたので關係者は驚いた。殊に粗末な假病舍であつた爲に畏れ多いことであつた。

病舍は甲と乙とに分られてゐて、甲病舍には比較的輕傷者で、再び戰線へ送られる傷兵のみを收容してゐた。乙病舍には到底再び起てぬ重傷者を收容してゐた。

病院側では殿下の御仰せがあることで、之を御斷り申上ぐることもならず、現狀の儘、謹んで御巡視を賜はるしか方法はなかつた。只御案內申上ぐる病舍は甲病舍として、病院側丈に於てお決めしてゐたのであつた。乙病舍に御出を願ふと云ふことは餘りにも畏れ多きことであり、且此悲慘な狀景の傷兵をお目にかくることは御不敬に渡ると云ふ考へもあつたからである。

殿下はその日の午後に同病院に御成り遊ばされた。甲病舍はそれでも淸められ傷兵達にも豫め御不敬に渡るが如きことのなきよう充分の注意を與へてあつた。繃帶も出來るだけ汚れてないものに代へられてゐた。病室は常にも增してきちんと整頓せられてゐた。もうすつかり準備が出來た。病院長、軍醫、看護長、卒等一同は玄關先に整列してお迎へ申上げた。

殿下には一先づ病舍の一室に御少憩遊ばされ、院長の一通りの報告を聞召されて一々御うなづき遊ばされた。これからは病室の御巡視となられる御順序の時に、

『余は先づ乙病舍を見舞ひたい。』

とお仰せられた。

『ハツ！畏りました。』

院長はさう申上げるしかなかつた。然し院長の驚き、周章、自づと色をなした。今となつては如何とも致し方ない。此の痛々しい姿の兵士、悉く致命の重傷者が入つてゐるところ

であるのだから、呻吟する者、そして異樣な臭氣のするところ、その有樣をお目にかけ申さねばならなかつた。

## 七

やがて乙病舍のドアーが靜かに開けられた。そこには何と痛ましい狀景が展開せられたことであらう。或者は頭、又或者は胸、そして一人は腹等に銃創を受け、只々死への悲壯な姿の勇士ばかりであつた。

『ウーン』

と、かすかに呻めく聲が聞へて來る。殿下のお目には何時しか玉の露が宿らせられた。國の爲、陛下の御爲、此の勇士達は命を鴻毛の輕きに比して戰つて呉れたのだ。何と云ふ尊い犧牲であらう。やがて殿下は一兵卒の横はるベツトの側らに御進み遊ばされた。

此の兵士は身に十數箇所の傷を負うて、顏は云ふに及ばず殆ど全身を繃帶で包まれてゐた。勿論彼に殿下の御成を見奉る由もなければ知るよしもない。

『君。』

『ハイ。』

御聲のする方に兵は顏を向けるやうにして答へた。

『傷は痛まないか。』

『痛い。』

兵は簡單に答へた。勿論尊き殿下であることなどに氣がつかないのだから止むを得ない。

『故郷の父母、妻子のことを思はないか。』

兵は暫く答がなかつた。何で故郷を思はない筈がない。思ふのだ。思はねばならないではないか。けれども兵はそれを云ふことを喜ばぬ。武士の常である。腑甲斐なく斃れねばならぬ兵であるかも知れぬ。輝しい功名を立てゝ凱旋して行ける身でありたかつただけに、それは敢て死を怖れるのではないのだけれど、負傷の創を痛めて戰地の病舍に、空しく明

暮に惱む彼にして見れば、男子の本懷でなかつた。くやしさが增せば增すだけ色々な意味での故郷を思はせられたであらう。それにしても此の御言葉の主は誰方樣であらうかと、兵は心ひそかに考へさせられてゐた。

『故郷のことなど思ひません。』

兵はきつぱりお答へしたのであつた。殿下の御胸中を畏れ多くも人々はお察し申上げた。

殿下は御手を差伸ばされて彼の右手……繃帶の儘の……をとらせ給ふた。

健氣な一兵のお答に、どんなにか御滿足遊ばされたのだつたかは、我々の御察し申上ぐる以上のものであつたに違ひない。

『お蔭樣で我軍は連戰連勝ぢや……上　陛下に於かせられても、忠烈無双の兵士等に御滿足のお言葉があつた……。』

『ハイ！』

彼は何故かしら身動き始めた。

『痛むか。』

殿下は再びお問ひ遊ばされた。

『陛下が……お勿體ないのであります。』

彼は「陛下」の一語を耳にして、日頃からの教育精神に我に返り起立せんとしたらしかつた。

## 八

善男善女は一語一句に、感激しつゝ聽いてゐた。勿論私もその中の一人であつた。

坊さんの話が勝れて上手だとは思はなかつた。然し物語りは心を强く打つものがあつたからであらう。

殿下は更にお言葉があつた。

『內地へ還りたいとは思はないか。』

『還りたくないのであります。』

『内地の病院で治療したらよいかも知れないが喃。』

『自分は一生内地へ還りたいと思うて居りません。』

『それは又どう云ふ譯か。』

殿下は不思議に思召されたのであつた。

『もう一度戰線に出ることになつてゐます。此の繃帶を一日も早くとつて、自分は思ふ存分働いて戰死したいと思つてゐます。』

悲壯な言葉であつた。此の兵が戰線から後送せられ、病院に收容せられた時のことである。その深い痛手、而も十數箇所の負傷である。氣の毒ではあつたが所詮彼の生命は一兩日の短い運命であると看た軍醫は、

『大したことはないぞ。元氣を出せ。』

と力付けねばならなかつた。

『軍醫殿、自分はまだ大丈夫だと思ひます。簡單に手當をして下さい。一刻も早く第一線へ出してやつて下さい。』

彼は夢我夢中にさう云つた。勿論彼自身は張り切つてゐるのだから自分の身體に負ふた傷の程度を克く知つてゐなかつた。只どことなく身體にしびれを感じ力なく思ふたに過ぎぬ。此の負傷で戰死せねばならない自分の命數を知つてゐよう筈はなかつた。

『よし手當をしてやるぞ。そしてお前の望み通り、もう一度戰線に送つてやる。』

『軍醫殿、ありがたう存じます。たのみます。お願ひ致します。』

『おゝ淺い傷だ。すぐ癒るぞ。これしきのものは。』

『さうですか。』

『さうとも、元氣を出せ。氣を確かに持て。』

軍醫の眼からは何時か涙が出てゐた。かうして話をしてゐる間に彼は意識を失うて行くのだつた。昏々として不省に陷つてから、彼は數時間の後我に返つた時には、殆ど全身は繃帶に包まれてゐるのに氣がついたのだつた。身動きすら今の彼には自由でなかつた。命脈

の一呼吸、一刻宛彼の死は近づいてゐた。今此の彼の側らに畏れ多くも殿下の御成り遊ばされてゐることなどは知る術もない。

『もう一度戰線に出る決心だが。』

殿下は此の一兵の言葉に、御自ら問はせらるゝ如く又答へさせらるゝごとく、かう仰せあらせられた。數刻の後に、此の兵の忠魂は天空に飛び去るであらうのに、彼は否、彼の赤忠の魂は、尙今旺んに活動してゐるのではないか。此の一個の憐れな兵の心臟の活動が止るかも知れない、が然し此の誠心は、此の忠誠の魂は此の世の續く限り、永遠に生きてゐる。生きて行くのではないか。さればこそ我が皇軍の誇りだ。力だ。此の魂の我等が胸中に生きてゐる限り、我が皇國は泰山の安きにある。

殿下はいとも御感激あそばされた御色に見受けられた。

『君は今最も欲してゐることは何か。』

とお問ひ遊ばされた。

## 九

私は尙此の物語りを書き續けねばならぬ。此の語り殘された一の實話から、やがて私の標題への結論に入らねばならないからである。

殿下の御言葉をその最初から彼は一般の慰問者でないと感付いてゐた。然しよもや至尊の上御一人樣の御名代にあらせらるゝ殿下であるとは、露知らぬも亦止むを得ぬ。只何となく限りない慕はしい心にさせられてゐた。自分が今最も欲してゐることは何であるか、などに就いて考へてゐない彼だつた。第一線への再び進む以外彼に欲望がなかつたのだから、このことはすでに申上げてあつた。靜かな病舍に不運を歎く一兵の心は昨日までの戰線生活への追想にひもすがらの思出を辿つてゐる。

今お前の最も欲してゐることは何かと問はれた。彼は案外な答へであつた。

『煙草を一服吸ひたいと思ひます。』

『煙草を？……』

殿下は問ひ返された。軍規はそれをどうせねばならぬかといふことは、一兵卒の充分知つてゐたことだつたらうし、云ふまでもなく殿下にもよくお判りのことであつた。此の世限りの只の一服、それを此の兵卒へ吸はしてやることが誰か軍規を紊したと云ふものぞ、爲に皇軍の軍規干犯と云ふことは何人でさへ云はしむべからざるに非ざるか。然れども殿下はそれを進んでなさらうとは致されなかつた。先づ院長を顧みられた。

『どうかね。』

院長は靜かに頭を下げて同意の御答をした。

殿下は御自ら煙草をとらせられて、それに火をつけて此の兵卒の口へ吸附けさせ遊ばされた。兵卒は呼吸一杯に吸うて紫の煙を吐き出してゐる。

『おいしいか……。』

『はい。』

痛ましい此の兵卒の最後の願ひを聞き屆けさせられた殿下のお情けに人々は感泣した。そして又憐れ露命の名殘りに一服の煙草を吸ふ兵のいぢらしさにも泣かされるではないか。此の一服の紫煙の如く消えて行かねばならぬ彼であることを知つてゐるだけに、尙更に哀れを偲ばすものがあつたのだらう。

『貴下は誰方樣ですか。』

急に兵は問ふたのであつた。

『余は天皇陛下の御名代の宮ぢや。』

とお答へがあつた。

『エッ！……』

彼は驚いた。彼は恐懼させられた。

『殿下！……　殿下!!……。』

口に二三度繰返しながら彼は不自由な身を藻掻きながら起き上らうとしてゐる。

『畏れ多いのであります。』

と彼は叫ぶやうに云つた。

『そのまゝ、そのまゝでよろしい。』

殿下は制せられた。

『勿體ないのであります。畏れ多いのであります。』

彼は兩手を合して殿下の方へ最敬禮をした。神か、佛か、その權化か、只一心に殿下のお情け厚きお心に打たれた印象、此の姿こそ彼一兵の最善の心であり、人の心の善の全部である形だ。

## 十

此の一兵卒の心象を云ひ表すことが不可能である。偉大な存在の前に感激的極致の心頭は慟哭してゐる。神を拜む心、佛を念ずる心も將に此の瞬間に於ける一兵卒の心と異らな



い。私が繰返して書き來たつた印象生活を強調する所以も、漸く歸納的結論に辿り着いたように思ふ。

我が心の所有者は自身である。私が他人の心的生活に入つて行けないように、他人が私の心へ入つて來られぬ。然し我が心は他人の心に比較したり、或は他の事象を介して判斷したりする自由さを各自が有してゐるべき筈だ。そこに反省があり、良心の活動すべき限界があり、善惡に關する判斷が生れるのである。人の心の尊さは茲にあると思ふ。

我々は此の社會に生くる以上は、決して自分勝手なことをしてのみ良い筈はない。他の人々との協調が必要だし、社會との調和が平和の基礎である。社會との調和とは、社會的精神に適存して行かねばならぬ大きい務めである。その義務は常に必ずしも一方の權利に對してゐるものでない。道義的觀念に於ての義務である。その道義的觀念は一つの社會生活の範疇を型つてゐるものである。此の範疇の中に生きて行く法則が示してゐる社會が、かうした或範疇の秩序を紊させぬことを要求してゐる。此の秩序を破る者があれば防衛せ

ねばならない。それだから法律などゝ云ふものが必要になるのだ。

然し私が今日まで書いて來たつた『人の心』は、その社會の拘束的な意義とは全々別なことであつた。とは云へ、勿論社會から要求せられてゐる範疇内で又その中のパラダイスとも云ひたい善の心を知りたかつたり、甦へさせたかつたりして來たものである。謂はゞ人の心の方面的觀察は千變萬化に存在してゐようが、歸一すべき點は只その良心を中心とせねばならないと云ふことだつた。

此の良心は常に如何なる者にも生きてゐると云ふ前提であり、惡人が世の人々に憎まれるやうな行爲をしてゐることは、彼に良心が全々消失してゐるのではなく、良心が他の心的闘爭に於て惡の力に排擊せられて姿を見せてゐない時であり、その惡の力を我々の心から追放することは常に善的印象を人なり物を介して良心に反映せしめて行かねばならぬ。その善的印象を、良心の鏡を雲らせない心がけを以て、始終我々の心に撮して行くことが必要だと云ふのである。

此の良心の鏡を雲らせない心がけにはどうすればよいか、それは人間の倫理的心理以上に強いものを信じて生きたいことだ。神を念じ佛を信ずることなどはその中の最も重要な一つであらう。偉大なもの、前に強い印象を受くることも亦そのうちの一つであらう。一兵卒が自分に優しくして下された御方が殿下であると云ふことを知つて、重傷の身を忘れてベットの上に起上らうとして出來得ず、手を合して拜み奉つてゐる心は、要するに神佛信仰の心と異ならない。斯る心を甦すことによつて、我々は自らの心を尊しとし得る。人の心の至善の姿だ。（八、三、一六）

## 一歩前の反省

一人强盜がゐた。彼の出現はその犯行の巧妙さと、その行爲の慘虐性とで世の中の人々を怖れさせた。が然し如何に彼が手口が巧妙であつても、所詮運命は彼を永久に見逃して

置く筈のものではない。問もなく捕縛せられて終つた。

彼が最初に云つたことは、彼の妻と子との安否についてゞあつた。『私のことを妻も子も知つてゐるでせうか。』かう云つた。彼も人間だ。『私は何うなつてもよろしう御座います。私は悪いことをして來ました。その報で、どんなに嚴しく罰せられても仕方がありません。只最後に妻に會はして下さい。子供を一目見せて下さい。』これが彼の最後の言葉であつた。

若し此の男があゝも怖ろしい犯罪を犯す前、その行爲の一分前に踏み止つて妻の名を呼び子の名を一口呼ぶだけの機會があつたならば、犯罪人にならないで濟んだであらう。罪は憎いことだ。此の男一人のした行爲が、その妻や子にどんな結果となつて影響して行つたらうか。

『私のことを妻や子供が知つてゐるでせうか』と。

彼が捕はれ人としての最初の言葉だつたのだ。何故この人間の正しい心がその時よりも數刻早くこの言葉を自分に發せしめなかつたらう。『妻に會はして下さい。子供を一目見せて下さい』と。

彼は最後に云つた。妻に會つて子供を見てゐられた日は、彼は仕合せな日であつたのだ。たとひその日が貧しかつた時でも。

人は貧しきが故に不幸だとは限らない。貧しくとも心は常に富めるを以て誇りとせねばならないではないか。紅葉山人の物せし金色夜叉に、青い顔して心配しながら自動車に乘つて宴會に行く富豪もゐるが、己の妻子を車に乘せて花見に行く車夫もある。と云ふやうなことが書かれてある。小説の主人公の言葉を借りるまでもなく、私共は物質的に地位を必要以上に欲して、苦しむ、所謂富豪たる事よりか、よしんばその日稼ぎの貧しい生活であるにもせよ、己の妻子を車に乘せて、花見に行く身分を幸福とせねばならない。心の扉が弛んでゐる間に悪心が隙間を窺うて侵入して來るのだ。

良い心の養成は六ケ敷いように思ふことがいけない。何でもないことだ。悪いことだと

思ふことをせぬように自制してゐればそれでよい。その自制すると云ふことは悪の心への牽制である。自分の心を鏡のやうに拭いて置く心がけが要る。若しさうだつたら、假に強盗に入つた時のことを想像して、その姿を心の鏡に映して自分で見たら、その恐しい姿に自分で戦慄して終ふであらう。

悪行の一歩前の一反省が出來る人にならねばならない。（八、四、二七）

# 狐の話

## 一

食ふものも、飲むものも無くなつたので、狐は日毎に痩せて行つた。此のまゝにしてはゐられない。何かを食べなければ死んで終ふかも知れぬ。けれどもうつかり自分の穴から出やうものなら、獅子や虎に見付かつて自分が食べられて終ふ危險がある。

そつと穴の入口から外をのぞいて見た。大變に良い月夜である。自分の死活問題などは、何の關係ないやうに平和な月は照つてゐる。靜かな夜の神秘に、うつとりとして山や木の姿を眺めてゐた。

『さうだ生きて行く方法を立てねばならない。』かう思ひついてよろ〳〵しさうな足どりで山を下りて行つた。あの怖しい獅子の姿も見えなかつた。虎の聲も聞えなかつた。

自分の力で働かなければ誰だつて食はして呉れる者などはゐないと云ふことは、狐はよく知つてゐた。が然し何時であつたかよほど前のことであつたが、自分は珍しい犬に會つたことがあつた。何でも主人とか云つて、三度食事を馳走して呉れる親切な人が居ると云ふようなことを聞いたことがある。さうすると自分の力で働かないでゐても食ふことが出來る方法もある譯だ。

狐はふとその犬のことを思ひ出してもう一度その犬に會つて、ことによつたら自分もその親切な人に救つて貰へるかも知れないから願つて見ようと決心した。

何時の間にか自分は清い泉のほとりに來てゐた。鏡のやうに浪一つ立つてゐない水面に

月の影が浮いてゐる。山の姿もさかしまに映つてゐた。汀に立つてそつと自分の姿を水鏡にうつして見た。いくらひもじい思ひをしてゐるとて、その姿の卑しさにぞつとした。狡猾さうな自分の目、そして此の尖んがつた口でこれからその親切な人のところへ行つて、いろ〳〵と涙を流した風にして話さうとする自分かと思ふと、何とも云へぬ浅ましい姿に自分が見えてならなかつた。

もう一度よく考へて見よう。そんなことを頼んでよいものか、それとも悪いことなのか、と云ふことよりも、どうして自分は食ふことが出來ないでゐるのか、自分で自分の力でこれから食ふことさへ出來るのならば、食べてゆかねばならないではないか。世の中が悪いやうなことを、此の間仲間に會つた時に云つてゐる奴があつたが、あいつだつてちつとも働かうとしてゐない奴で、人の蓄へてある食物を騙したり、おどかしたりしてばかり食べてゐるのではないか。わしから云はせれば世の中なんぞはちつとも悪くない、自分が悪いんだからだと思ふ……が今の自分は矢張り一度犬君に會つて見る必要がある。

## 二

自分は子供等へのお伽話を書いてゐる積りはない。我々人間の中に、此の物語りの狐のやうな考へを以て生きようとしてゐる者が居るのではないかを思ふからである。生きて行くと云ふことは、我々の最も重大なる問題である。自分の力に信頼して生きて行かねばならぬことは、又生き方の重要な基礎である。

現時の社會は色々複雑したる事由が纏綿してゐて、なるほど力一杯の生き方が出來なかつたと云ふことも決してないでもない。その因つて生ずる原因には、社會的に影響してゐる場合も無いとは云へない。只それだけのことである。即ち社會的影響があつたとしても、それは大方の場合を論ずる唯一つの理由とはならないではあるまいか。

食へなくなつたから、と云ふことは社會の影響で、自分としては止むを得なかつたものであると云ふ理由が泥坊の言譯になるとしたならば、犯罪制度の根本から改められねばな

らぬことにならう。さう云ふことになるとするならば、先づ我等は共同生活の非常な不安を感ぜしめられ社會の秩序は紊亂する。そこに人間性の倫理世界なく、社會性の德義道德なく、食ふ爲の唯一の場合に手段なく之を選ぶとしたならばどう云ふことになるであらうか。

ユーゴーの小說にレ・ミゼラブルと云ふ彼の右名なジヤン・バルジヤンを主人公にした物語りがある。ジヤンは一片のパンを盜んで姉とその子の飢を救はうとした。只それだけのことをしたに過ぎなかつた彼は、遂に牢獄に繫れた。おそらくジヤンはその盜みの一刻時に人間社會の尊むべき約束を忘れてゐたのだらう。あの場合ジヤンの採つた方法は彼の唯一の方法だなどとは信ぜられぬ。否、それが此の時彼の唯一の方法であつたと假定しても、私はそれを止むを得なかつた手段だとは云はせない。

此の物語りは、社會の無情さを強く語り綴つてゐる。然し私はその社會の無情さ、少くとも此の物語の主人公ジヤンに對する社會の仕打を冷酷に思ふことが出來たことほどそれだけに彼の救はるべき筈であつたことを痛感させられた。ジヤンを恨むことよりも社會の仕打を憎むことが出來るとせば、その社會を憎む心事は尙ジヤンを救ひ得たであらう人情を意味するに外ならない。ジヤンは即ち狐の其の後とつた行動よりも劣つてゐると云はねばならない。

狐は犬の居つた里へ來た。此の儘會はないで歸らうかと躊躇した。まあどう云ふことになるか會つて見ようとやつて來たのだつた。

## 三

何時か來た時には大きい鐵扉の門が開け放されてゐたのだが、今夜はそれが堅く閉されてゐた。誰もそこら邊りに居なかつたのを幸ひに、得意の術で六尺餘りもありさうな塀をひらりと飛越えて這入つて行つた途端、豫期しなかつた曲者の闖入に驚いた犬は猛烈な勢で喰つて襲擊して來た。狐は狼狽したが、よく見るとそれが曾て親しく語り合つた犬君で

あつたのでやつと安心した。

『何だ君だつたのか。』

犬もやうやく狐であることを知つて笑ひながらさう云つた。

『こんなに遲く一體どうしたつて云ふのか。』

犬は狐の不意の訪問を怪しんで尋ねた。

『實は君にお願ひごとがあるんでね、と云ふのは、ほら君のところの主人ね此の間君の話では非常に親切な情け深い方だつて云ふことであつたが、此の俺もだんだん世の中が世智辛くなつてきたもんだから、もとのやうにも働けなくなつたし、又働いても何となく馬鹿々々しいとも思つたりするもんで、若しかしたら君のやうに毎日遊んでゐて食はして貰へることが出來るものならば、一つ君の主人に御賴みして見て貰つてその親切に縋りしたいものだ……と思うてね、毎日穴の中でそんなことばかり考へてゐたら、此の頃では食ふもの、蓄へさへ盡きて終つて、こゝ四五日何も食べないでゐる仕末だ。まあ是非とも君の主人に紹介して賴んで貰へないかね。』

『それや氣の毒なことだ。では明日の朝早速主人に御賴みして上げようまあ今晩は遲くなつたから僕と一緒に番兵の役を務めて呉れ。』

『番兵の役つて……？』

『さうよ、僕は毎晩主人の命令で寢ずに此の邸内を巡警してゐるんだ。怪しい奴が闖入して來たらかみついて殺してやるんだ。人間の社會には仲々六ケ敷約束があつて、他人の物をことわりなしに盜つたりなんか出來ないことになつてゐる。ところが了簡の惡い我我仲間の樣な奴がゐて、他人のものを盜んで持つて行つたり甚しい奴になると、强盜なんて云うて恐喝して他人の物を奪つて行くのもゐる。でそんな奴は大方眞夜中にやつて來るんでね、さう云ふ奴が來ぬやうに、來たら吠えておどかしてやる役割さ、で夜分だけが僕の活動の時であり又自由な時でもある。晝は裏の僕の小屋に鐵の鎖で繫がれてどこにも出られないだけが苦痛と云へば辛い一つさ。』

『鐵の鎖で毎日繋がれるつて……！』

『さうよ、仕方がないことだ。』

『それや始めて聞くことだ。僕はそんな不自由な生活をしたくない折角だが紹介して貰ふのは止して貰ふ。矢張り自分は自分の力で生きて行く自由を望んでゐる。鐵の鎖で縛られても食はして貰へばよいと云ふ考へは非常な間違だ。僕の行く天地は廣い。いくらでも生きて行く方法がある筈だ。』

狐は踵を返して彼の自由な天地へ自力で生きる道を求めて、犬に別れを告げて歸つて行つた。只一刻、只一食それに窮した人がゐたとして、それを我慢出來ずに罪の汚名を着るとしたら、私はこの痩せ衰へた狐にも劣つた人間だと云ひたくなる。（八、五、一八）

## 大石の夢

只譯もなく古い偉人に遭ひたい氣になつた自分である。然も此の頃の騷々しい社會にその人を迎へてもう一度仰ぎ見たい念願が何とはなしに自分の胸に湧いて來る。かうした心の欲求は、遂最近の頃からのことである。

初秋の宵を二階の書齋に仰向けに寢轉んで、開け放した窓から一陣の涼風が、ほてり勝な顏を撫るやうにして過ぎて行く時に、蒼穹の彼方、無限の天空に神秘な星座を凝視して、大きく溜息を吐く……何かしら今の自分は大きい惱みを感じてゐるのだ。小さい自分では解決し切れぬ問題、その渦中に、日本中の誰彼の差別がなく捲込まれてゐるかのやうに思へてならない。

郊外の宵は靜かに夜へ沈んで行く、都の雜沓は流れて時折電車の軋が聞えて來る。

『内匠家來四十六人徒黨、上野宅へ押込み、飛道具など持參、上野を討候始末、不恐公儀段、重々不屆に付、依而切腹申付者也』

滿座肅然たる中に御上意の次第が讀上げられる。

如何なる時代にあつても、天下に衝動を起すべき事の勃發した時には民衆の聲が囂々と

して湧き出づる。赤穂義士の助命運動はその忠烈なる仇討の義擧に賞讃惜しまず同情が集つたことは論を俟たぬ。

かうした聲を後にして、大石が拜伏、――かたじけなき御上意を以て切腹を仰せ付けられありがたき仕合せに存じ奉りまする。――四十三歳、男盛りの良雄の最後の日である。

細川家大書院の廣庭、あたりは死んだやうな靜けさの中に、檢使荒木十左衞門の凛とした聲、

『大石内藏助』

『かしこまりまする』

白無垢の裃、白羽二重の小袖に桑染の下着、白足袋、白扇を前に挿みて兩手を其の上に重ね、同志へ此の世限りの左樣ならの挨拶と、お先に參ると云ふ意味とをこめて目禮を交し……靜かに導かれて行くその最後の姿、爲さねばならぬことを仕遂げた二年の間、此の擧を起す爲の苦心その願望は成つた。然もこの事たる當然天下の法度を犯した責は免れぬことである。又免れたくはない。法は情に先じられねばならぬ。情は常に必ずしも正しくはない。されば、大石は切腹の申付けかたじけなく御上意を申受けて、從容として死に就く。

三疊の青疊を敷いた設けの席に端然として坐した大石、檢使へ一禮の後……一刹那！……はつと自分は吾にかへつた。嗚呼大石の夢を、まどろむうたゝ寢に見てゐたのだ。

（八、八、三一）

## 働く者の明朗さ

人の生き方にも色々ある。飽くまでも人生を朗かに送らうとする人と、これと反對に何事をも悲觀的に考へてゐるものとあるが極端な對照である。

西洋の或哲學者が云つてゐることがある。即ち『人間の一呼吸、一鼓動、それは死の墓場に向ふ悲しい進軍喇叭だ』と。考へ方に依つては、それは滿更嘘のことではないかも知れぬ、天運の壽命は、如何なる人にも拒まれない宿命であらう、けれども、それは王侯貴

賤の別はない。一度此の世に生を享けたる者の全部は、必ず死に逢著せねばならない事實は爭はれない。然もそんなことを考へねばならない必要があるのだらうか。

私は子供の相手になつて、私の家から二三丁離れてゐる目黒不動尊の緣日を漁つて歩いての歸り、公衆が圓陣を作つてゐて、何か見世物でもあるらしい一團を發見した。人垣の後の方からのぞいて見ると、一人の中老紳士とその子らしい十三歳位の少女と七歳位の少年とがゐた。

皆さん私は妻を亡くし、職を失ふた一中老人です。私は私とそして妻の殘した此の二人の子をこれから此の男手に依つて育てゝ行かねばなりません。妻に死なれたことは人生の破產であつた、ルンペンとなつたことは大きい人生の悲劇だ、これからどうして生きようか、と矢張り私は凡人の惱みを抱いて居りました。あどけない二人の子等を抱いて全く途方に暮れてゐたのでした。

然し私は急に自分の腑甲斐ないのに氣が付きました。男の腕一本、生きて行けない筈はない、さう考へ出しました。叩けよ開かれん、道は近きにあり、私は朧氣乍ら習ひ覺えてゐたヴアイオリン一挺を、それも長い間押入の中に仕舞込んであつたのを取出して、辻音樂師として起つたのです。

勿論私は音樂師だなどゝ自分を言ひ得るほど良心が痲痺してゐません。自分の技倆の程度はよく辨へ拔いてゐます。頗るまづいヴアイオリンです。皆さんに聞いて戴けさうもありません。只私等親子は三人で歌ふだけです。一生懸命に歌ひます。そのあとで此處にある飴を買つて貰ふのです。それも特に安いのではありません。普通のお店と變りありません。私は極めて少額を儲けさせて戴けばよいのです。

かうして三人で働いて、三人で食べられさへすればよいのです。それ以上ぼろい考へは絕對にありません。人間は、それでよいと只今では確信してゐます。私等親子は勞働をしてかうして辻に立ちつゝ歌つてゐますことによつて、實に何とも云へぬ朗らかな日を送ることが出來るのであります。ではこれから歌ひ出しませう。

かう云つて、此の辻音樂師はしわがれた聲を張り上げて歌ひ出すと、可愛い二人の子はそれに續いて合唱した。これだけのことであつたが私は此の親子のことを思つて言ひ知れぬ力を是等の人達に感じた。（八、九、一四）

# 眞　劍

此の間或會合の席で、面白い話を聞いた。甲州の出身で既に耳順を越えた人の話である。甲州は山國だけに、昔から藝道に精進して自ら慰安してゐたものである。殊に村芝居などが始終かゝつて、子供等に至るまで芝居のことなら一かどの批評眼をもつてゐた。劇の筋を觀ると云ふことより一歩劇評的な域にまで進んでゐる者が多かつたとのことである。その古老も芝居が好きで……殊に自ら舞臺に出て一役演ずる方の顏で、村役者になつてゐた。

或時同好の士と共に村芝居を組織して『忠臣藏』を開演したことがあつた。相當人氣を集めて、素人芝居としては先づ上々の入りもあつたし、連中も氣をよくして一生懸命にやつた。此の人の役は由良之助であつた。

或夜……判官腹切の場に出る前、樂屋で連中と餘談に花を咲かしてゐると、チョン〳〵と拍子木が鳴つて、由良之助がはな道から駈けつけねばならぬ段になつた。知らせを受けて……早く〳〵とせき立てられ……觀衆は、由良之助はどうした……遲いぞ……喧噪を極めてゐた。遲れたらそれこそ一大事ハッと思つた、袴の股だちを右手で上げ左手に刀を持ち……その紐を手頃に延ばして口にくはへ……走り出て行く筈なのであつたが周章てゐた爲に口にくはへた紐がだらり下つて……それを普通にしやうとして却つて刀を引摺つて終ひ……その刀に躓いて轉倒した、が然しこれでは芝居が無茶になつて終ふ……尙も起き上つて走つたが、刀がまた〳〵邪魔になつてばつたり……はな道を半分も出ないうちに、由良之助此處に只今推參……と云ふやうなせりふを夢中の中に一生懸命で口上したものであつた。

まあ此の幕もこんな工合ではあつたが、別に笑はれもせずに濟んだのであつた。芝居が終つてから、迎への車が來てゐると云ふ、東京の方からだとのことで、一體どうしたことかと氣にしながら伺つて見た。勿論一面識もなかつた人であつた。

今日は久振りに眞に追つた芝居を見せて貰つた。貴方が駈出して來た場面は、由良之助の心中を充分に察することが出來た、實に千兩役者の及ばないものがあつた、私は芝居が好きで歌舞伎座などへも始終行くが、仲々氣合の迫つたところは見られない。

と云ふお賞の言葉を受けて、成程と思つたとのことである。

氣合と云ふのか、心の集中した一刻の眞劍さは、芝居に於て現はるゝ態度にさへ眞に迫るものがある。況んや或事に邁進せんとする者が、そのことの行爲に眞劍味を打込んで爲したらむには、所謂精神一到何事か成らざらむである。（八、一二、七）

# 相撲精神

一年を十日で暮すよい男、

日本の國技としての相撲が國技館に於て十二日から春場所興業をしてゐる。ひと頃甚しく世人に忘れられかけてゐたのが、近來再び猛然と人氣を煽つて、此の場所は殆ど連日滿員と云ふ盛大さである。

野球、ラグビー、ホッケー、ゴルフ、拳闘と云ふが如き、輸入スポーツがすつかり近代人の注目をひいて終つて、古代的と云ふより反時代的で、典型的な遺物スポーツ、その餘りに時代遲れな遊戯である等凡ゆる酷評を浴せられ乍ら、然も尙捨て難い風趣と忘れ難い懷かしみと、更に一種の武士的氣品を有してゐる相撲が、さう易々と日本人の心から消えて行く筈のないことは當然である。殊に眞の日本主義的な、そして又傳統遊戯として殘存してゐる懷舊性歴史性などに、云ひ知れない親みがあるのではないか。

斯かる意味で、非常時日本の反映を此處にも發見さるゝやうに自分は思つてゐる。一年を十日で暮すよい男と、川柳子が簡單に詠んでゐるけれど、關取の此の十日は、實に過去一年間血みどろの稽古と努力の試煉の期間である。

これを一勝負に就いて云へば、實に數分一刻の運命に過ぎない。此の數分一刻の時に發揮する力は、一年も二年も更に五年もの修練と奮闘との結果であることを思へば、蓋し十日で暮すよい男と云ふように單純に考へられまい。肌をつんざく寒風も、或は炎熱燒くが如き夏の日も、血と涙と砂とにまみれて勵んでこそ、十日の華々しい場所相撲に尊い價値が存するのである。

四股を踏む時の彼等の眞面目さ、仕切の眞劍さ、力の權化だ。自分はかうした意味から相撲を見てゐる。勝つも負けるも勝負の數は別である。

去年の夏場所に、昨秋九州の興業先でふぐを食べて死んで終つた沖ツ海と、現大關武藏山との大相撲を自分は恐らく一生忘れられないであらう。

兩力士は、入念に仕切つて猛然立ち上るや、烈しく突合つてゐたががつちり四つに組んで土俵の眞只中、根が生えた如く双方とも動かなくなつて終つた。此の儘時間が來て一時預りをした後で、再び元の體勢に組ませて行司が兩力士をバタとはたけば、押しつ押されつしてゐたが、又々一寸も動かない。兩力士の顏面は蒼白に化して行つた。玉のやうな汗がギラ〳〵と光つてゐた。觀衆は興奮の絕頂に達したが兩力士は益々蒼ざめて行く、結局引分けになつたのであるが、自分はあとで考へて見た、あの儘にして置いたら死んで終ふたかも知れないと。

力と技の外に、更に此の心の緊張とは命がけの眞劍さである。所謂土俵を枕に死するの覺悟は敢て相撲に限らない。我々の人生に於ても同樣でなければならぬ。（九、一、二五）

## 良心の力

旅の獅子舞姿の小藝人から五十錢の銀貨を詐取したジヤン・バルジヤン、世の人々から

遠去けられ、さいなまれ、虐げられてゐる彼は、それを別段惡いことをしたなどゝ、人間並に考へて見る良心は、とうの昔に無くしてゐたのであつた。

青空を仰ぎ見て、無限な神秘を思ふことがあつた。星辰の降る夜、月の淡青な光を浴び乍ら何かと淋しいことを考へたくなつたりした。人の世界の煩雜さから、孤獨な場所を探し求めて、獨りぼつちになつてゐることが、何となく好きでならないようになつた。

僧正が贈つて呉れた銀の燭臺、心の燈明を燈すことを忘れてならないと云うて授けて呉れた筈のそれを、何心なく手に取上げて見入つたりした。あらくれた人生を歩んで來たジヤン、慌しく一日宛自分の生命が過ぎて行くことなども、時折思うて見たりすることもあつた。燭臺が何の力を此の俺に與へて呉れる！心の燈明などとそんな僞善めいた言葉が、眞劍に食ふ爲に生きようとする人間に、どれ丈の價値があると云ふのだ。

俺があの小さい旅藝人から五十錢銀貨を詐取したことが、何故惡い、轉がり込んで來た小さい寶を、それを俺は彼に返してやらなかつたに過ぎないことではないか、此のジヤンのしたことが、俺とあの小僧との間に、一寸の時間に勃發した小さい惡戯に過ぎないことを、……神樣がどうの僧正がどうしたの、社會の人々が、それをどう批評しようと、それは餘りおせつかい過ぎてゐるのではないか、ジヤンは自分でかうして辯解してゐた。

正しいことであつた行爲は、自分で辯解することの必要はない筈であつた。自分で自分を辯護してゐることが、彼が反省の機會に際會してゐる證左である。自然に憧れ神秘に觸れる心、そして又僧正の目なざし慈愛の姿などが、彼が一つの行爲をする度毎にうるさく思はれて來たことが、ジヤンの良心の呵責に外ならない。如何なる惡人でもジヤンの如き罪人でも、その血と共に良心が生て流れてゐるに違ひがない。

マドレー市長になつてゐたジヤン、僧正の銀の燭臺に向つては、あの憐な小さい旅藝人から詐つた五十錢銀貨が、壽命を縮むるに充分な程苦しい秘密に惱まされて來た。

市長が何だ、俺は市長の榮冠に安んずるより、五十錢の罪に我が良心を賣ることが出來ないとて、從容縛についた彼の心を、尊くあがめたいと思ふ。（九、二、人）

# その時の十錢が今贈る一圓より尊い

駕籠町の一學生から清水富坂署長宛の手紙の中に一圓の小爲替券を封入して健氣にも哀れなる一少女の納豆賣へ屆けて吳れるやう、依賴したと云ふ人情美談を數日前に新聞紙上に見て、一學生の德行に感激してゐた私はある機會に此の學生の認めたその時の手紙の全文を見ることが出來て、更に大なる感動を與へさせられた。

君がその夜更けの出來事を、君とその可憐なる一少女とが、街頭に於て遭遇したに過ぎない二人限りの小さい問題として顧みる良心がなく葬つてゐたら、我等は特に君を知ることなく恐らく君に關して語ることもなく、永遠に互に不知の人として過ぎて行くことであつたらうが、若し假にさうだつたとしたら君も極めて平凡な人でゐたであらうし、我等も君に關して涙ぐましい美談を聞くこともない不幸に、知らぬ間に遭つて過ごしてゐたのかも知れない。



學生さん納豆を買つて下さいと、寒風身を切るやうな夜更けに縋られるやうな哀調の言葉を振切つて來た君が、家へ歸つて靜かに思ひを此の哀憐な少女の身上に巡らして見た。

君は自らを責め自分の冷淡な行爲を悔い、その時の十錢が彼の少女の爲に、如何なる意味に於て必要と滿足とを滿されたのかも知れないことなどを思ふと、自分の冷酷無情な所爲に今更の如く罪を覺えたのであつたらう。

買つて上げればよかつた、買つて上げるのだつた、その一本の納豆が自分の生活に絕對に必要でなかつたとしても、その對價の十錢が、彼の少女の爲とその一家には生命の糧になるのだつたかもわからない。自分は自分獨りの滿足を購はなかつたのみならず、路頭の哀憐な少女の感謝と滿足とをも蹂躙したのだと考へたらう、『その夜はまんじりとも出來ませんでした。』と書いてゐる。

その時の十錢は今贈る一圓よりは尊いことはよく判りますとて、自分の零細な學資金の中から割いて、此の心の惱みをせめても慰むる爲に、一圓也の小爲替を封じて書面を以て訴

へ出た君の純情さ、兎角人情の薄れ勝ちな此の頃に、君の此の德行を知つて我等は良心の琴線に觸れる感激を禁じ得られない。

不幸にして我等は君と面識がない。然し君の生きたる教訓は、我等の心に君と共に生きて失せることがなく、その德行美談と共に永遠に知己たり得ると信ずる。（九、三、一五）

## 自我創造の雜感

私は哲學とか宗教に就いて、特殊の勉强をしたことはない。

人間生活の內心的創造について憧憬を抱いて不惑の年になつた。

安逸を貪つて平凡な人生を終らうと念願した常識は、非常な誤りであつたことに今更驚いてゐる。

生死を超脫した人生は如何など、、釋尊の如く深刻な反問を四十年の過去に懷いたことはなかつたが、一日の生活に於てすら小さい事件に苦惱を嘗めて、憂鬱な日を過した經驗は決して皆無でなかつた。

漸やく此の頃に至つて自我の淨心を志して、是空の心境に生きたいと念じたりすることがある。……それがどんなに尊い思案であるのだかを、今頃になつて漸やく氣がついてゐる。人と社會に對して不平と不滿とを感じ、自我不折の心の扉を固く閉してゐて、その寂寥を痊すことが出來ない悶へ……反抗……等は、自我の主張に隨從すべきことを、他人に向つて牽制してゐる煩惱の淺ましい表れであると云ふことも判つた。

我々凡人が悟道の大觀を開くことは出來ない。然し生きて行くと云ふことは何を意味してゐるか、パンを得たことによつて生命を保つことが出來たと云ふに止まる人生ならば、哲學も生れまいし宗教もなくていゝ筈であらう。

試みに釋迦の歷史を顧みると、深山曉空に輝く星と共に我悟りを得たりと絕叫する三十六歲までは、太子の高位と名譽と……そして財產と……此の世の中に存在する如何なることでも求めて得られないものはなかつたではないか。にも拘らず生死の外に超然たる人生

を求めて、眞の人間を凝視して惱んだであらう釋迦を想像し得る。

パンを得ることは人生の總ての解決であるかのように思ふ者もあるかも知れぬ、それが誤りであることは、釋迦の例を語るまでもなく、私は人間の生活にはより以上省察すべき問題があることを信じてゐる。それは今日の我より明日の我へ、よりよき自我の創造に志して生きて行くことこそ人生の意義ある所以であると思つてゐる。

名譽ではない、地位ではない、財產ではない、人生最高の目的は自我の創造にあると云へる。

然らば今日の苦みは何を意味し何を敎へてゐるか、それは明日の自我への創造苦であり一階梯である。過去の苦惱は未來の自我の歷史である。

罪に悔ゆる者、惡に苦しむ人は以て未來の正しき善良ならん自我の創造に心がけねばならぬ。

己を葬ること勿れ、自我を創造して明日に生くべきであらう。（九、五、一六）

# 日本精神

大和魂と云ふことを我々は子供の時から口にして來た。それはどう云ふ意義を持つてゐるのだかはつきり言葉で說明出來ない。我々日本人の傳統的な日本精神の誇りである。

この大和魂と云ふ日本民族特有な心、意氣、精神は、私などの子供の頃の考方では、戰爭の時に忠勇な兵隊が、陛下の爲皇國の爲に命を鴻毛の輕きに比して働く時の場合、或は何か事變災厄の勃發した場合等に緊張することのある心的發露である位に考へてゐた。然し日本精神即ち大和魂は、戰爭の場合乃至は事變災厄の場合にのみ發露し生成せらるゝ精神でないことは今更云ふを俟たぬ。只平時の時には比較的顯著にその行動等に現れてゐないことゝ、日本人自身がそれに氣がついてゐない場合が多いのである。

一度何事か突發すると、勇往な精神が全國民の動脈を同時に漲らすやうな鼓動を打出すのであるが、それは源泉があるからこそなのである。源泉即ち平常の場合にでも日本精

神、大和魂なるものが我々の胸底又は血管に潜められ流れてゐないならば、どうして異變時に際してのみ我々全國民に湧出交流され得よう。茲に我等の注意が怠られてゐる。大和魂は……平時に常に我々の一血球にも滿されてゐるのであるが、それを表顯せしめ活動を爲さしめない不注意があるのである。

大正十二年の大震災、空前絶後の災禍に見舞はれて弛緩してゐた日本精神に、一大衝動を與へたその結果、十年の歳月の間に大復興の事業が完成せられたのである。此の精神作興、此の奮起、此の勇氣、これこそ大和魂の眞價であることは云ふまでもない。が然し斯る場合に際會し、周章狼狽して日本精神を喚起せねばならぬとすれば、通常時の緊張を失つてゐるか、又は甚しく國民の精神訓練に無關心であるかに依るもので、我々自身の負ふべき責め重く、國民の過失今日の非常時にありて、これより大にして危險なるはないと思ふ。

紀元半世紀前大ローマが六日七晩の妖火に見舞はれて、絢爛の美都ローマも荒涼たる燒野原と化した、ネープルスの灣水清く只徒に在りし日のローマの面影を偲んで、ローマ滅亡を扼腕して迎へる術より知らなかつたからこそ、ローマの華々しい歴史の頁は閉ぢられて終つたのだ。

ローマ人は此の時ローマ人の志氣を失うて終つた。然るに我等日本人は、關東の大震災に大帝都の全圓を燒土にしたけれど、日本精神の……大和魂……の心の土臺は尙磐石の堅きを失つてゐなかつたのだ。

非常時日本、全世界から孤立した日本、四面楚歌の感なしとせぬ日本は、或はやがてより大きい、更に甚大な『時』がないとは云へぬ場合でもある。

大和魂の眠を警鐘打つて醒さねばならぬ。（八、九、二一）

## 日の丸の旗の思出

我が子供の頃には戰ごつこがよく流行つたものだつた。日の丸の旗とロシアの旗とを拵

へて、日本兵とロシア兵とに分れて、互に攻めたり防いだりして遊ぶことが多かつたが、誰もロシア兵になるものがなくつて、年上の者におどかされて小さい方のものが結局ロシア兵にさせられた。ロシアの兵隊は丈が高いのだから、大きい人にロシア兵になつて呉れなどと、子供並の主張をして殴られたことなどもあつた。

或時の思出だが、一度自分は日本兵の方に入れて貰へて聯隊旗手になつたことがある。勿論旗は日の丸の旗であつたが、それを聯隊旗と云ふことにしてゐた。ところがロシア兵の方に、とても腕白な、と云ふより亂暴だつた私より二つ年上の子供がゐて、白兵戰になつてから旗手の私を殴る蹴るの暴行をした上旗をとり上げやうとした。死んでも敵手に旗を渡さないものだと云ふことを聞いてゐたし、さう云ふ戰爭美談なども知らされてゐたのだから、遂に眞劍に喧嘩になつて終つた。ところが不思議なことには、今まではその子にビンタ一つで泣かされてゐた私が、此の時斷然喧嘩で勝つたのだ。相手の子を反對に殴りもしたし、爪でひつ掻いてもやつたし、嚙りついてもやつた。その後私は大變強い男として名を賣つて、相當の羽振りをして歩けるやうになつたのだつた。

私が子供の時にこんなことをしたことを今日役所の歸りに思出させられたことがある。それは私の近所の子供たちが七八人ゐて、一番大きいのが玩具の日本刀をたばさんで一同を指揮してゐたが、その横隊になつてゐた列の後に、一人の子がとてもふくれて土の上に坐つてゐた。

『おい來いよ』

『いやだい、僕一ぺんも大將にしないぢやないか』

と云ふのだつた、私は思はず微笑した。死んでも旗を手離されないとて、喧嘩した頃の自分を懐かしく思ひ起させられたからである。

大將にしない理窟もある。私はかうした頃から日本人の魂の中にとても尊いものがあることを喜ぶのだ。

アイルランド自治問題で一大示威運動が行はれた時に、興奮した群集はユニオン・ジヤ

ツクの國旗を街道に積上げて、これに石油を注いで燒いたと云ふ話を聞いて驚いたことがある。

日本人は、ポーツマス條約が國民の意に滿たなかつた爲、彼の燒打事件を端緒として勃發した日比谷の國民大會に於ても、群集は各々懷中から赤く染拔いた日の丸の旗を振り上げて萬歳を絶叫した……、野次の胸中又一脈の日本人の血の流れを物語つてゐる。これは小さい時から……或は生れる前から、我々日本人に誇ることの出來る國旗に對する觀念性の顯著な表現である。（八、一〇、一九）

## 國際反逆者たる勿れ

正しいことを主張することは、人と場所とその時の如何を問はず堂々たるがよい。内に顧みて疚しからざれば、千萬人と雖も我行かむ哉の心組が必要である。正しからざることを强調する事は必ずや失敗に歸す、その正しからざるが故である。

徒に順ふことは又常に正しいとはせぬ、邪を正し曲を矯るが爲には勇往の氣慨が必要である。然し人類の社會は調和協同の生活である。一徹の正しさは、却つて結果に於て然らざることが往々にしてある。

正しきに逆ふは己を欺き自ら卑下する。

日本は正しく主張を爲して來た。顧みて疚しからざればこそ、國際聯盟脱退をも敢てして怖れない。此の意味こそ、名譽の孤立であり千萬人と雖も我行く氣魄を示したものである。

己を賣ることは最も卑劣なことである。我等は媚を外國に賣ることほど左樣に卑くない。我等は飽くまでも世界平和の爲に協調を惜むものではない。

畏れ多いが聯盟脱退に際しての詔勅に此の御聖旨が拜せられ、大いに中外に宣揚あそばされた世界協調主義こそは、大御心であらせられ又同時に日本の不變の態度を明らかにせしめられたものである。故に日本は故意に反逆する意思は毫もなく、況んや他國に對して

挑戰するが如き考へがないことは勿論である。

特に私は此の際日本國民がユダとなる勿れ、反逆者たる勿れ、と戒めねばならない理由がある。それは何か、我に反逆の意思がなくとも、挑戰の意思がなくとも、他國が我々をユダたらしむる可能性と危險とがあるからである。

十三人の弟子、その弟子の中から自分を猶太の人々に賣る者がゐることを知つてゐるキリスト、鷄鳴曉を知らす頃には、お前達とも別れいばらの責苦を受けて十字架に吊される身であることも豫知してゐたキリスト、一片のパンを分け與へ我が肉と思へ、一雫のブドウ酒を我が血と思へよ、と最後の別れを告げ乍反逆者ユダに賣られて我は行く、と……。キリストは矢張り人間だつた。俺を反逆者だと……此の時ユダは自分を疑つてゐたが、よし、俺は反逆者だ、俺はキリストを賣る、かうして遂にキリストはユダをして反逆せしめて了つた。

キリストに於てすら尙一人のユダを反逆者たらしめた、キリストならざる外國の國々のことだ、日本を反逆者に取扱ひさうである。だが我等は決してユダにはならぬ。

常に正しさに於てのみ堂々と主張するのみ、正義の旗下に起つことあるは反逆者とは云はれない。（九、二、一）

## 協和の力

一よりか二は大であり、三は二よりか大である。一人の世界よりは二人の社會が強く、三人の社會は更に強大である。

斯る理論は生物社會にも同樣推論される。但し一定限の範圍に充滿された飽和狀態の社會には、生存競爭と新陳代謝の進化的現象に依つて適當に調節されて、そこに適者生存に伴ふ悲劇の生ずる場合のあることは到底避け得ないことである。例外の場合は格別として、一より二が大なる理論は、我々人間社會の結成に於ても亦肯定されることである。強い力が社會を指導して行く理由もそこにあるのだと思ふ。

協力の必要はそれ自體必至的要求であるとして、この協力に對して、敢て反抗せねばならない場合の理由は大體に於て少いものだ。十人十色と云ふ諺があつて、人の意志は各自特有であると云ふことは、協調社會の犧牲的沒我の範圍外に於てのみ之を認められるもので、共同生活擁護の上にあつては獨存の自我を主張させる理由はない。その自我の主張は、往々にして協調破壞の原因となることがあるが、それは大いに互に戒めねばならない。獨存の世界に倫理も道德もそして政治も宗教もないのだから、人間社會に一の反逆者として永久に實存生活を爲して行けないことは自明の理であらう。

罪を犯す場合に、その罪を罰せねばならない社會的國家的理論乃至基礎觀念も、共同協和の安全性に求められてゐるのはこれが爲である。そして私の確信するところでは、この場合の力は絕對のものである。この理由を審にすることに於て、刑罰の運用に絕大の意義を認める。

協和的生活の反逆者に對して、誰でも之に應報する自由を許さない理由も、協和生活自體の當然の結果である。茲に國家の權力が全面的に強大に指導力を有する譯がある。國家の權力は、常に協和生活の最も妥當な意義に於て當然活動する。

共同の生活は有機的結合として生命を保たねばならぬ。その生命たるや國家社會の生命であると共に個々の生命である。國家の生命の健全性は自由人の生命の確保と兩立する所以である。故に國家權力の尊大なるべき事由は、個人の安全を保護する理由と必要とに一致する個人の生命權は個人の力丈で保護が出來ない强力無限の力——國家の權力と併存されねばならない。

縞馬が猛獸の襲擊に遭ふと彼等の全員が一致集團し、頭を內側にして圓陣を造つて、その强力な後肢を以て蹴りつけて對抗する。獅子でも虎でも一寸手が出ない。然し此の協同の力を以てこそ對抗出來てゐるのに係らず、偶々愚かな奴は、自分丈の安全を欲して圓陣から飛出る、その飛出るのを猛獸は待つてゐる。飛出た奴は直ちに容易に猛獸の餌食となる。以て自ら愚かなる共同生活の犧牲となるので、單獨な獨存自我の自滅する理由は、此

の一例がよく物語つてゐると思ふ。（九、三、二二）

# 教化愚感

我等の社會生活に於て、罪を罰すべき理由を端的に云へば二つ存する。その一つには社會の共同生活を刑罰を以て防衛する爲に、又一つには犯人の惡性を矯正することの爲である。

道德的領域に於ては、只其行爲が社會的德義に對して責任を負ふに過ぎない場合に止まるが、法律的に責任を負ふことのなき行爲は所謂刑罰的責任行爲と云ふことが出來得ないが、我等は現今の個人的利己的思想の瀰漫しつゝある今日にありて最も看過し得ない事實は、此の反道德的行爲の刑罰に觸れざるものゝ、餘りに社會的に重要性を有し且反映すべき影響の大きいと云ふことである。

法律に抵觸しないから、或行爲が罪とならぬと云ふ理論は、今日如何なる程度まで之を





是認して然るべきかは、非常に重大な問題であることを痛感してゐる。法律が之を處罰しない否處刑する能はざることは、今日の法制下に於ては止むを得ないと云ふことになる。この止むを得ない場合を、反對に正當なる行爲と思ふに至る者が決してないのではない。

茲に我等の最も憂慮すべきものが存在し、この存在は可及的に我等の努力によつて排除されることを期さねばならぬが、その努力は到底絕對的效果は期待し得ない情勢であると信ずるのである。

或一個の反社會的行爲に對して之を如何に處置し、社會に於て此の行爲の繰返さるゝことのないやう、又主觀的にその惡性を矯正すると云ふ方策は、司法制度によつて累次改遷の最も時代に應ずる方法等によつて目的を達し得ると云へようが、未發生犯罪防止の立策は、獨り我等の努力のみによつて樹立せらるゝものではないのである。

況んや刑罰の威嚇應報の觀念より目的主義的觀念に遷移し來たる理論を以てしても、今日科刑の對社會的效果に就いて尙多くの疑問を有するに於てをやである。

然し私は科刑の價値が、犯罪防衛上效果がないと考へてゐるのではない。寧ろ刑罰の目的遂行の上に如何に之を處理改善せられなければならぬかに、多大の關心を持つてゐると云ふのである。

文教施設の改善、退嬰しつゝある道德思想の喚起と涵養、個人的利己的思想の防止、國家社會の組織制度に對する正しき認識、此の正しき國家社會の認識に基く協調生活の理論的根據を明確にする事を得せしめ、殊に家族制度の頽廢に基く社會上の缺陷を……文教の力によつて補正しなければならないと信じてゐる。

文化文教の力と犯人に對する我等司法關係當路人の努力と相俟つて、犯罪防止の實績を期さねばならない。然らば我等の教化事業の使命たる又重大であらう。

（八、一一、三〇）

# 第二篇　時事斷想

昭和八年三月より昭和九年六月まで

# 第二篇　時事斷想

## 隨感隨想

### 寫眞に題す

絢爛の美、爛漫として咲き狂ふ櫻花、陽光麗かなるなごやかな日和に、カンバスを花の雲下に据てスケツチする兒童、これを見て尊い教訓を感ずるものがある。何人か美の感觸を失ふとしたら、その人の人生觀の殘りの半分は惡の姿である。

此の自然の美に接して感得する印象、その感觸を繪にして形に表はさうとしてゐる子供の美への憧れ、その心理は所謂眞善美の極致感であらう。人間の大きい正しい印象は、斯かる機會に最も深められるものだ。

不純さの毫末をも認められぬところに自然の偉大な教訓があり、南洲の『人を相手にせ

ず天を相手にせよ』との、金言の眞理なることを知らねばならぬ。

## 陸軍功賞

あの優しい傳書鳩、蒼空何千哩を一氣に飛んで味方の爲に働いてゐる勳は涙ぐましい奮闘だ、鷲や鷹の襲擊に會つて、憐れや地上に冷い骸になつて發見された例もあつた。通信筒を抱へるやうにして死んでゐるのを見たら、諸君はどう思ふか。軍犬、軍馬、何れ劣らぬ美談を殘してゐる。されば吾々は此の物言はぬ戰士に對して、一掬の同情と感謝の涙を捧げて來た。こんど陸軍省はこの愛らしき勇士へ勳章を授けることにしたとのことだが、誠に嬉しい計畫である。

國の爲に殉じた可憐な勇士の靈を衷心から慰めたいと思ふ。

## 殉國相傳牌に就いて

日露戰役に、乃木大將がその愛兒二人を失ふた話は、有名な事實だ、それは痛ましいことである。けれども然もこの事は軍人として限りなき名譽であると思ふ。今度帝國軍人後援會では日支事變に當つて日清日露の戰役以來、一家庭から二人以上の戰死者を出した家庭に對して、感謝と慰安の意味で、殉國相傳牌を贈ると云ふことになつたとのことで、永く一家の名譽を後世に傳へることにならう。

それ等の家庭は大なる犧牲もあつたかも知れぬ。然れどもその犧牲こそ、國家は黃金と權力とを以てしても贖ひ得ざる尊い名譽であらう。

一人の殉國戰士の血と肉と骨とがあの地に埋れて、七千萬國民の平和と安泰とが得られたとしたならば、如何に尊き犧牲であつたかを知らねばならぬ。私は今尙曠茫たる滿洲の野に、皇國の爲奮闘しつゝある兵士の身を偲んで、感謝の熱涙を禁ずる能はずと云ふ感を深められてゐる。

## 野球と人生

東京大學野球リーグ戰は今いよいよ酣である。一個の球の行方、九人の選手と數萬の觀

衆の目が此の球の上に注がれてゐる。面白いではないか。個人の行動、國家の動き、此の球に注ぐ注意の焦點を向けて、己を顧み國家を考へたらどうだらうか。小に過たんも此の注意の足らざるが爲、大を爲さんとするも此の心の向け方である。（八、五、二五）

## 拳闘

スポーツの魅惑は選手の精魂を盡しての奮戰にある。勝負は眞にスポーツの目的に存しない、第二次的意義に過ぎないと思ふ。私は野球、ラクビー、角力、拳闘と、凡そ此の種のスポーツは出來るだけ多くの機會を作つて見てゐる。

五月二十三日夜六時から兩國の國技館に、拳闘の日佛對抗日本代表選拔決勝戰が、萬都のフアンをぎつしり壽し詰の滿員盛況裡に開催せられたが、私はそこに充滿してゐる空氣の殺氣横溢する闘爭の現實を目のあたりに見た。人間の本然の氣魄を窺知することが出來る。血みどろになつて闘ふ有樣は一種の云ひ知れない悽慘な狀景である。

或選手は強直打を受けて倒れた。バツと打倒した選手はリングロープに引き離れて、彼の再起のタイムを待つてゐる。打倒せられた彼は九の聲によろ〳〵と立上つた。強い眩暈を感じてゐる。然も尙戰を續けやうとした。更に一擊遂にその悲壯な敗者の骸をリングの上に横たへた。觀衆は打倒者への拍手と、そして又敗れた彼への拍手とを惜まなかつた。

私が始めて拳闘を見た時には、その餘りにも凄い場面を寧ろ蠻的なものとして憎惡を感じた。然しそれなのに二度三度と私を吸引する何物かがあつた。それは人生の闘爭に對する本然的魅力に外ならないと云ふ考へをしてゐる。人生は闘爭だ、文化の進展し來たつた社會の歷史、その歷史自體がそれを雄辯に物語つてゐる。

然し私が謂ふところの人生の闘爭は、進化論的な自然性を意味してゐる。支配とか、階級とかの階級闘爭的、人工的、技術的な意味は更にない。

眞劍に活動して生きて行く自分たちは、そこに自然的支配下にあらゆる闘爭をしてゐるものであることは間違がない。只その何れの點が如何なる姿での闘爭であるかに就いて

は、それを見極むるに社會は餘りにも複雜である。その闘爭を愛好した覺は人間の歴史に
は發見出來ない、が然し闘爭の止むを得なかつた事實は歴史自體が語つてゐる。そして何
時の間にか人間の闘爭性が習慣づけられて來てゐた。負け嫌ひの魂はどんな人間にもあら
うそれがスポーツに見る眞劍なファイト即ち闘である。そこにスポーツの眞實性がある。再言せねばならぬが、私のスポーツ將又闘爭と云ふ言葉に、勝敗の價値が問題にされてゐない理由は『闘』自體に意義を發見してゐると云ふことに存するのだ。

角通で有名な柳澤伯が土俵觀として、力士諸君が勝つも負けるもあの眞劍な努力をして闘ふ精神は、何とも云へない魅力だと言はれてゐる。

自分の目的へ、人生の行程を此のスポーツの闘爭精神を向けて突進して見たいと思ふ。

（八、六、一）

# 百合の花

端麗、清楚、その奢らざるうちに、ひと際崇高なる氣品を具へ、然も高雅なる德を偲ばする百合の花は、古から繪畫詩歌に持映されてゐる。溪間に一輪、つゝましい姿に咲いた百合の花などは、見る人をして一入優雅な感情を湧かしむる。あの美しさ、そして馥郁たる香、それは造化の主が彼に備へしめた美德の表徵たるを思はしむるではないか。あゝ百合は正に萬花の中の君子とも謂ふべした。

上見れば限りなしとや思ひけん
下見て暮す百合の花瓣

と云ふ歌があつた。我等にもよき教訓を詠んだものだ。吟味賞讃の價値がある。我が心が常に百合の花にも似て、清く明るい美しさを保つて居ることが出來れば、自然に德光も備るであらうと思ふ。徒に只外觀の美麗を飾るとしても薔薇の花の如くとげを藏してゐるのでは眞に優しく美しいとは云へないではないか。

謙讓の美德を我等は此の百合の花一片に習ふべきではなからうか。（八、六、八）

# 受刑者の愛國心

畏れ多いことだが明治大帝に
國をおもふみちにふたつはなかりけり
軍の場にたつもたゝぬも

と云ふ御製がある。所謂銃後の國民に教へ給ふ大御心と拜し奉るが、滿洲事變以來國民の愛國心が慰問品献納金と云ふ形となつて表れ、夥しい數額に上つてゐることは屢々新聞に見受けられるところであるが、過般陸軍省の發表中に苦役の受刑者から身は獄裡に繋がるゝ不幸な境遇にありながら、祖國を愛するの情禁ずる能はずして献金した者が相當にあつたことが報ぜられてあつた。自分は非常に嬉しく思つた。彼等の一錢は如何にして得られたかを知る自分は、その心掛に感激せずには居られない。（八、六、八）



# 自由に就いて

私が曾て某地方へ旅行した時の汽車中の出來事であつた。同窓がゐたので、途中まで久振りに語らうと思つて三等車に乘込んだ。然し列車は滿員であつたので私の坐る席はなかつた。私は立話をし乍ら、どうせ友人が途中で降りるのだから、と思つて別段坐らねばならない要求はなかつたし、私自身の席は二等車にあることでもあるからと思つてゐた。然しその友人の坐つてゐる席の前の椅子には、一人のたくましい青年……あとで聞いたが地方青年團の神宮體育大會へ出場した相撲選手だつた……が二人席を占領して横臥してゐた。

これに就いても別に私自身は氣に留めてゐなかつたが、同じ車輛の中に立たせられてゐた者は不平だつたかも知れぬ、列車はある驛に停つた。そこからもう一人の青年が乘込んで來た。此の青年も勿論坐るところはない。私たちの側に暫く立つてゐたが、急に『此の人

を起してお坐りになりませんか』と私に云つた。私は自分は第一途中までのことであるのみならず二等客でもあつたのだから『ありがたうすぐ降りるんですから』と答へた。

此の青年は此の込合に横に寝るつて無作法はないと云ひながら『もし〳〵君一寸起きて下さい、坐らして下さい、お席をお分け下さい。』と寝てゐる青年に言葉をかけた。『うるさい寝やうが起きやうが自由だ勝手だ。』と云ふ挨拶であつた。すると此の青年は默つて其の男の頭の上にどつかと坐つた。私はどちらも面白い青年だと思つて見てゐると、坐られた青年は苦しみ出した。『僕は當然かうしてやる權利があるんだ。』と坐つた青年は云つてゐた。下になつてゐる青年は身體も大きいし力もありさうだ、坐つた青年は小柄である。若し二人が腕力で爭ふとしたら勿論一人は跳ね飛ばされるであらう。

『君は自由だと云ふ、勝手だと云ふ。僕も同じ論法で自由だ、權利だと云ふだけのことだ。然し君の自由は利己心の滿足を意味してるだけだ、言換れば欲望だ。自由と利己的欲望とは兩立しない。我々はお互に青年だ、すくなくとも社會人の第一線に立つて德義とか道義とかの範を示し合はねばならぬ、眞の自由は食ひたい時に食ひ、寝たい時に寝る、その爲に他人に如何なる迷惑がかゝつてもよいと云ふのとは大いに違ふんだ。互に犧牲的精神奉仕があつて、その心の滿された時を自由だと云ふんだ、然し解らず屋には實力行使も止むを得んよ。』この青年は堂々人々を說得するやうに、主としては此のわがまゝの青年に對する抗議を、朴訥な地方訛も却つて重々しく聞へるように云つた。

『すまん悪い、勘辨して吳れ。』と云ふ聲に『わかればよい同胞だ、嬉しいよ。』かう云つて彼は立ち上つた。『ぢや賴むよ。』かう云つて、もう一人立つてゐた五十位の女の人を呼んで坐らしてやつた。『君悪く思はないで吳れ、僕はかう云ふ者だ今後よろしく』名刺を差出して……それを受取つた二人は哄然と笑つた、二人とも地方青年團員であつた。

二人の言葉は更に二人の善悪に對する判斷力と態度、私は非常に感じさせられた。

（八、六、一二）

# 夏の山

山！　山！　自然の神秘と緑深き神境とを懷にして夏の山はその雄大なる魅力を以て我等に呼びかけてゐる。

巍然として聳えてゐる態度は、如何に男性的で潑剌たる意氣と覇氣とをその姿に見出さるゝことよ。人間社會の騷々しき雜沓、生活戰線に齷齪して蠢動する我等の社會を、悠々從容として睥睨してゐる雄姿は偉大なる威嚴を感ぜしむ。

我等は夏の山姿に接して偉大なる人物を偲ぶ。その雄大なる、その堂々たる、その泰然たる、然も悠然として迫らざる等の點に、偉人と山の兩者に一脈の相通ずるものあるを思ふ。

夏は山か、山頂に登つて遙かに俗界を睥睨し、所謂拔山蓋世の英氣を養はんも可なる哉である。（八、六、二九）



# 人力の驚異

丹那トンネルが開通した。實に十六年の長歲月を費して、世界的關心を集めて居た難工事がいよ〳〵完成したのだ。我が鐵道工事界の歷史的事業として、その成功を世界に誇ることが出來たのだ。

自然の力は偉大である。文明とは此の自然の力を人力によつて破壞して行くことを意味してゐる。人力、人智が創造的自然を科學的に征服すると云ふことは、常に必ずしも喜ばしい結果のみとは限らなかつた。文明の進歩開拓は、他面に多くの犧牲を支拂はされた歷史を經て來たからである。然しながら人智の發展、文明の進歩は人類社會の向上發展と改革とを促進せしめて來た。それは我々人類の改革進歩に伴つて失はれた犧牲よりも、與へられた人類福祉への利益が多かつた事を知るのみならず、人力により自然を征服せねばならぬ必至的要求が、發明の段階をより强く益々精巧に導いて行つたからであらう。要求は

發明を生むのである。

二萬五千六百四十尺の抗道工程、此の難工事に拂はれたる十六年間に亙る努力、犧牲、苦闘、忍耐、到底筆舌の語り得ぬものがあらう。ナポレオンが世界に不能と云ふことがない。

There is nothing impossible in the world

とアルプスの冬の嶮を越えたことは有名な話だが、丹那トンネル開鑿工事の場合の如きは、始めてこの言葉の眞理を知り、人力が如何に更に驚嘆すべき偉力を發揮するかの事實を語るものである。

敢て云はんと欲することは我々人生行程に於ても、此の確信力の涵養を必要とすることだ一閃する鶴嘴の力、忍苦十六年、辛苦は人生の常であり、その苦難を忍び徹してこそ光明の彼岸に到達する　（八、六、二九）

# 常陸丸遭難の思出

我々は古い出來事を追想する必要がある。その事の喜ばしい事でも悲しむべき事でも將來の歴史を建設する上に於て過去の記憶を新しく喚起することは最大の必要である。

今や非常時日本に際して三十年前の常陸丸遭難を回顧して、轉た感無量のものがある。

（八、六、二九）

## 向上の進路

輕快、明朗、平和、夏の海上に浮かぶヨットを見ての直感である。然し彼女が帆に風を孕んで進路を誤らぬ注意は常に怠つてゐない。

人生も輕快に明朗に然して平和でありたい。然も常に向上の進路に向けた羅針盤を注意せねばならぬ。（八、七、六）

# 大亞細亞聯盟の結成

人種的結合は十八世紀の個人自由主義の沒落後、殊に歐洲大戰爭後の著しい傾向として表面化してゐる。國家單位の理想は一民族一國家にある。然しその理想は政治的意義より觀察したものである外に理由はない。民族的運動は所謂ファッショ的思想となつて現出してゐる。斯る傾向の擡頭は、將來の世界が民族的國家主義に變遷し推移するであらう趨勢を物語るものでなからうか。ケマルパシヤ、ムツソリーニ、ヒツトラー等の出現は一の暗示を與へてゐる。

人類の團結は民族的と宗教的との結合の分類が出來る。民族的結合は人種的結合と自ら異る意義を有するが、然も民族的結合は人種的結合の直系的一單位に過ぎぬ。白色人種と有色人種とは人種の二大分類だ。單位性の民族的分類は此の何れかに屬するものである。人種的に融合すべき理論は、その文化的基礎に於て共通するからである。或學者が云つてゐる。即ち地球上の最終的戰爭は人種戰であると。地球の表面は地理的に白色有色の人種分布が截然と區劃せられてゐる。扨て國際協調主義は人類福祉の最高理想である。然しながら顧みて我が亞細亞の歷史的經過を考察する時に、果して亞細亞民族……有色人種は……他の何物からも、亞細亞文化の發展を妨害せられ又は迫害せられなかつたか。幾多の疑問は正しい我が亞細亞民族の判斷を俟つてゐる。

此の時に當つて廣東の一角より、日本を盟主として大亞細亞聯盟の結成が叫ばれてゐるとのニュースがある。政治的にも經濟的にも亞細亞は歐米より離脱すべき運命にある。凡ゆる意味に於て亞細亞民族は團結すべきである。私は聯盟の結成を衷心から期待し實現を熱望する。（八、七、六）

# 滿洲移民

滿洲に青山あり、骨を埋むる豈墳墓の地のみならんや。滿蒙の富源は無盡の寶庫として

世界に知られてゐる。此處は一木一石の生命にも我等が同胞の英靈が生きてゐる地だ。その思出の地に渡つて耕す一塊の土、振り上ぐる一閃の鍬、その意義は豈武裝の兵士と異なるところあらん。

滿洲は謂ふまでもなく我が帝國の生命線である。その國防上の見地からも經濟上の點からも人口食糧問題等の地位からも、亞細亞の心臟でもある。關東軍特務部の調査成り、いよいよ大量移民の計畫あることを聞く、誠に意義深いことだ。滿蒙の山河は我が日本人の移民を歡迎してゐる。あの山、此の川に殘された歴史のえにしを辿りつゝ行け、拓け、邁進せよ我等！。（八、七、六）

## 向上の過程

古今の別なく、英雄傑士の傳記を繙けば、その後世に不朽の名を成すや必ず偶然ではなかつたことを發見する。

クシナガルの野に美しき後光に包まれて眠るが如くにその生涯を終つた釋迦、その六十有餘年の人間性の苦闘一字不説の悶へ、今日の聖哲釋迦の名は、必ずしも今日に成れるものではない。三十五年道の爲に盡し果して、十字架上の責苦に遭つたキリストの生涯、傍らの石に腰を降して一匹の迷羊に悲しめる愛の彼、聖キリストの名は永遠なれど、その今日に名のあるは決して偶然ではない。

龍の口の日蓮は新興日本の礎石的聖人として仰ぎ敬はれること等を思ふ時に、その生涯に拂はれし尊き犧牲と、そして經驗こそ我等の常に學ばざるべからざるもののみ多い。

『雪の日やあれも人の子樽拾ひ』かうした運命にあることは敢て悲しむべきでない。今日の悲運は明日の幸福への段階である。艱難汝を玉にすとは云ひ古された言葉であるが、我等は自ら苦闘に生きて戰ひに勝たねばならぬ。人生は永久に闘である。闘は向上の過程である。今ふと或詩人が歌つた人生の詩を思ひ出した。

『咆哮する荒海の

風は益々強く波は愈々狂ふ
此方の岸を顧みれば
幾何も漕ぎ來らず
ボートは理想の彼岸に
何時の日にか辿り著かん
永遠への航路』

我等は常に漕ぐ力を失うてはならぬ。七月一日東京各新聞が『職工と油揚屋さんが教授試驗にパス』『東西獨學青年の明星』と題して二人の貧しき若人の記事を報道した。その一人は東京に於て職工をしながら勉強した二十一歳の荒川正一君、他の一人は大阪で油揚製造業をしながら苦學した二十四歳の柴田徹士君のことである。荒川君は國語科高等教員試驗に、柴田君は同英語科に見事合格した。

私は兩君が此の數年間に拂はれた努力と奮闘の經歴を、僅かに數行の記事の中にしか知



ることは出來なかつた。そこに文字言葉の簡略された便利さが認められるが、しかも兩君が今日の成果に費した血みどろの奮闘……如何なる形容詞を以て飾つても到底語り切れないではないだらうか。

兩君が今日の榮冠を獲ち得たることは決して偶然ではない。私は兩君の辿り來たつた境遇の尊さ……晝は油に浸り或はエンヂンの喧しい工場にハンマーを取り、夜は深更に至るまで勉學した奮闘の日を顧みることに於て、曾て偉人傑士の經驗したりし歴史の頁を新に繙くかの思ひを禁ぜられぬ。

若き、新しき、英雄傑士を待望しつゝある今日の日本、我等は此の時、兩君の如き青年の出現を國家の爲に喜ぶものだ。更に第二第三の荒川君、柴田君の出づることを切望する。

（八、七、一三）



# 祖國を思ふ心

それほどの認識をしてゐたのではない祖國愛的思想が、何かしら事變に遭遇してはつきり、表はれて來ることがある。自らは、自由主義的な立場にあることすらその主義的理論の上には自覺出來ないでゐるのが通常の場合である。右翼でも左翼でもない自分達は一體何であらうかなどに就いて考へる人達は、思想的には無價値な存在であると云ふよりは無智であるとの謗りを受けねばならないかも知れぬ。さもなければ卑怯であるのかも知れぬ。

思想的對象は社會であり國家である。その社會又は國家に屬してゐて、組織的一分子の生活の態樣に、主義的な必要は絶對なものか否かは私の究めたところのものではないが、唯物的か唯心的かの觀察はその誰彼を問ふまでもなく存在する現象であらう。截然とその何れかに分屬してゐるかの認識は、多くの人々は不鮮明である場合が多いものだ。自分は漫然としてかうした考察をしてゐるのだが、それ以上究明の必要を感じなかつたことほど左樣に白紙である。斯る考へ方をしてゐる人が、何時の世に於てもその屬する國家なり社會なりの大部分であつた。無關心的存在であらうところの之等の人々は、それでゐて歴史的に顧みて國家動向の基礎であつたなどは考へ樣によつては奇怪である。

社會國家に對する思想は例へば人間の良心的存在である。良心は常に正しい生存である。即ち國家社會に生存價値を有すべき思想は正しく只一つでなければならない。その正しさの判斷は、普遍的妥當性たる國是的精神を基礎として爲されなければならない。そは非常時國難等に際會して顯著に現出する。

爆彈三勇士に限りなき感激を禁じ得ない我々であることは、思想的分野的左右の理窟はない。只その感激自體が我々の思想であり主義であると云つたらどうだらうか。上海事變以來我等は多くの感激的事實を見聞した。軍事美談は勿論のこと、銃後に擧示せられた國民の德行等……久しく失はれてゐた寶物を探しあてたかの喜びや感激に等しいものがあつた。

私は又茲に苦學少年佐藤君の美擧の記事を見て、涙ぐましい感激的行爲を知つて、彼の愛國精神に感動した。貧者の一燈、それは眞に佐藤少年の如き場合を云ふのではなからう

か。愛國少年佐藤君は帝都防衛費として百圓を献金した。汗と塵の中を天秤行商して得た百圓であるだけに、それが如何に尊いものであるかを知ると同時に感激と感謝を禁じられぬ。

この德行、此の美擧、そしてそれ等に感動するだけの自分達は、その刺激に影響するところ尙國家と共に生き、祖國と共にあらんことの希望を捨てられてゐない。そのことを、私が滾然として尙心底より湧出する祖國愛的思想だと云ふのである。（八、七、二〇）

## 模倣文明

凡ゆる物は有機的に活動してゐる。云ふまでもなく國家も同樣である。從つて新陳代謝が行はれることは當然であらう。古く疲れたる汚れたものは、之に代つて新しく生きたる淸められたるものに驅逐せらるゝのが、有機的活動を爲すものに明白なる現象である。然しながら國家の場合に於ては、その生命が過去現在及永遠の未來に繼續するものであるから人間の如く死と云ふ終焉はないものと云はねばならぬ。勿論滅亡其他の場合に形式上の消滅があるけれども、それは我が帝國にあつては絕無であるし他の國の場合でも稀なことである。

國家が他の有機體と等しく新陳代謝をすると云ふことは、國家組織の上に於て變革されて行くと云ふ意味で云ふのではない。より良き國家の發展の爲に、永遠に存續實在すべき國家自體の活動に進化的要求のあることは、他の生物的進化と變らない理由があると云ふことを意味するものである、けれども國家は各々自主的生存の國體、國是等、その國家特有の文化的基礎を獨自の生命としてゐるものである。それが人間の心臟的存在である。

德川三百年の鎖國の夢は、浦賀灣頭一發の砲聲に破れてより我が日本に西洋文化の輸入は潮の如く侵入して來た。云ふまでもなく、必ずしも西歐文化を排斥すべき理由はないのである。之を直ちに體得する場合に於て、日本國家の發展に資することある例もあるからである。これと同時にその文化を受入るゝことによつて、却つて惡い影響を及ぼさるゝ場

合も少くはない。

それよりも自分の持つてゐる高價な物が、古くなつたような思ひをして、新しいもの或は新しいことはないが珍しいものを重寶がりたい心理が、人間の誰にでもあることであり、如何なる場合でも西歐の物事でありさへすれば新しく珍しいと思ふ考へ方をすることが、僅々六十有餘年の我が國の經驗した事實であつた。婦人の洋服が流行した當初にスカートの長いのを着て腰をバンドでぎゆう〳〵しめて、苦しくつて眼を白黑させてゐる漫畫を古い雜誌の中に見たことがあつた。そして註に曰く……但し眼の色はどうしても青くならぬ……と云ふのである。諷刺的適評であると思つた。

洋服を着ると云ふことは決して惡いことではない。己を殺すことの必要はないではないか。日本は日本特質的文化に誇りを持つのだ。然もその誇りは日本建國の基礎であつたのではないか。鵜のまねする烏水に溺るる譬へがある。

先進文化の價値判斷は、只新しさと珍しさの好奇的欲望の滿足では定められぬ。絢爛の美を飾る花でさへ毒花がある。（八、七、二七）

## 愛國少女と非常時

國際聯盟から光榮ある脱退を爲したる日本は、文字通りの非常時に遭遇し、今や名譽の孤立を守らねばならぬことになつた。全世界を相手として祖國日本の今後は益々多端の秋を迎へてゐる。ロンドンに於ける世界經濟會議は全世界の期待に反して不成功に終つた。その今後に及ぼす影響は獨り日本にのみ限られたことでない。世界經濟界は愈々暗雲低迷し不安を增加して全世界の神經を尖鋭にして行く。

自由主義から制限主義に、世界主義から一ブロック主義に、貿易上の自主的對立は如何なる道程を辿るかは今後の一大問題であらう。

最近の外電が報ずるところに依れば、支那の世界經濟會議代表たる宋子文が、潛行的に英米兩國と極めて順調に借款の成功を收めたとのことであり、加之米國との間には支那全

土の航空權を與へるとの條件にて密約ありとさへ傳へられてゐる。若し假にそのことが誤傳であるとしても、我等は斯る事實の發生が全然想像外のことであつたのではない。更に蘆山會議に於ては耐久的抗日と云ふことに決定し、それが前述の借欵問題と極めて連絡的であり宋子文の歸國と同時に支那の對日態度は著しく急變するものとも想像せられ、我等は單なる一支那問題に止らずして將に英米と正面的に對立すべき用意が必要であり、孤立日本の苦境は現實化して行くものと思はねばならぬ。我等は果して、來るべき日に處する決意と、然して覺悟とを有するかを更に自問せねばならぬ。

茲に一少女の愛國的壯擧を聞知して、自ら慰むると共に全國民の良心に問ふものである。我等は可憐なる一少女がその小さい心境に、非常時日本の姿を反映せしめ全國揮毫行脚の雄々しい壯途に上つたといふ愛國心に、我等は良心を強く打たれたような感激的眩暈を禁じられぬ喜びであり感謝である。彼のジャンヌダルクが自ら肥馬に跨がつてオルレアン城に祖國フランスの危急を救つた美談は、燦然として輝いてゐる。一少女ジャンヌダルクの愛國心がフランスを救ひ得たのである。

ジャンヌダルクの出現に依つてフランスは指導せられ、一少女の燃ゆるが如き愛國心によつてフランスは完全に護られたのである。我等は非常時日本の精神を、此の一少女によつて指導せられ、憂國一少女の愛國的壯圖によつて日本全國民の良心を喚起せしむるであらうと共に、此の愛國的良心の喚起こそ現時日本の最も必要なものである。

（八、八、一〇）

## 火亦涼

悟れば森羅萬象は吾と俱に在り。

自ら迷へば念佛誦經も戯れの業となる。

我々大地の有情と同時に成道す……と雪深き山中に苦業六歳に亙り臘月八日曉天の明星を見て忽然として大悟に入られた釋尊が云つてゐる。

無我の境に入ると云ふことがあるが、小なる自我、有限の自我、迷執の自我より沒我の

大悟に入ると云ふことは、我々凡夫の容易な業ではない。

曾て乃木大將が學習院々長になられた時、『夏を冬と思へ冬を夏と思へ』と生徒に諭されたと云ふことを記憶する。夏は夏、冬は冬、夏は暑く冬は寒い……夏を冬と思へ、冬を夏と思へ……と云ふお言葉は一通りの平々凡々な意味に解して終へば禪味がない。灼熱の炎天下地上の萬象燃ゆる思ひのする盛夏に、烈風肌をさく冬の日を思うて見ても汗の流を止める理由にはゆくまいではあるまいか？……と云つて終へば、此の名句の意味が無くなる。夏は暑いもの、冬は寒いもの……自我迷執……凡夫の常で止むを得ないことであるが、悟道の門を開けばそんな不平がなくなるのださうな。

泥舟……維新の三舟の一人であるが、一日上野の處靜院の住職に槍の腕自慢をした。住職は槍の業に就いて知る筈もないが

『是非お手合せ』

と泥舟に申込んだ。泥舟心中此奴ひどい目に遭はしてやると思つたが……どうしても寸毫の隙もない……泥舟は心氣昏迷した。全身汗に濡れた。

『參つた』

『貴僧の流儀は何流でござるか？……』

『强ひて申せば山は高く水は長しと去ふのぢやらう喃』

『如何なることでござる』

『凡て奥儀は人に教へられて得るものではない。自ら悟らねば氣が付かぬものぢや』

泥舟は迷つた。

『火も亦涼しと云ふこともある。何れ山高水長と同じことぢや』

それから五六年後、泥舟は龍門夜話を繙いて、快川禪師の『心頭を滅却すれば火も亦涼し』と火炎の上に自若たりし悟道の姿を知るに於て、豁然として悟るところがあつた。純一無雜の境涯に至つては、夏も亦冬と思へようし冬をも亦夏と思へよう。

迷執の自我より醒めて、大悟自由の境涯に入らんと云ふ心掛は、夏の暑さ冬の寒さなど

に不平云つてゐるやうな者に出來ることではない。さう云ふ自分はつとめて心頭を滅却すれば火も亦涼し……と云ふ快川禪師の言葉や、乃木將軍の夏を冬と思へ、冬を夏と思への禪味に一陣の風味を覺えて、汗中冬の感に入りたい心願で夏に生きてゐる。（八、八、三）

## 武藤元帥を悼む

人命惜むべし朝露の如きを如何にせん哉、嗚呼我等の英雄武藤元帥忽焉として薨去遊ばさる、その悲しみや極まりなし、昨日の溫容寡言の英姿今日尙我等と共にあるが如しと雖も幽明の境を異にして再び還ることなし。

瞼を開いて天を仰げば、日滿の空に弔雲垂れて悲しみの色も亦深し。元帥老軀を賭して滿洲國に赴き、最後の御奉公を全からしめて任地に殉る、英靈亦安ずるものあるべし。

我等は故元帥の遺志を踐んで誤りなく以て日滿兩國の發展を期して、故元帥の英靈を慰めん哉。（八、八、一七）

## アジア青年聯盟

八月九日新京に於て、日滿青年二千に依つて、亞細亞青年聯盟が結成せられたとのことである。全亞細亞の青年に呼掛くる計畫で、東洋が白色人の鐵鎖から獨立し大亞細亞主義の實現を期するにある。私は曩に大亞細亞聊盟の事に關し述べた。而も亞細亞青年聯盟の結成せられたるは、その目的に於て亞細亞聊盟と理想を同じうする所以である事論を俟たぬ。文化的に必然の結果として相倚る東洋人種の一大自覺であることは、大いに悅びとするところであり、その目的の遂行は將來亞細亞の興廢に係はる使命があるとも云へよう。

英國の大政治家にして大評論家たるジョン・モーレーが曾て母校オックスフォード大學の會に招かれたる席に於て、『余は年老いたる卒業生が、何を爲しつゝあるか何を考へつつあるかと云ふことを聞かんことよりは、年若き潑剌たる學生諸君が何を考へつゝあるか、何を爲しつゝあるかと云ふことを聞きたいと云ふ意味の演說を爲したことがある。寔

に意味深き言葉である。將來の大亞細亞を建設するものは實に青年諸君である。此の秋にあたつて日滿の青年有志が亞細亞青年聯盟結成の旗を擧げたることは最も意義あるものと信ずる。

國際聯盟が日本の脱退に依つて、名實共に歐洲聯盟たる意味に於てのみ存在するに過ぎなくなつた。然も日本が脱退を敢行し顧みて悔なきことは、實に東洋平和の維持と正義の主張とにある。國際聯盟が歐洲に存在價値を有する限り、亞細亞の利益を保護せらるゝことがあり得ない。

亞細亞は亞細亞の爲に起つべきことは當然であり、亞細亞の利益を保護し、亞細亞の平和を維持する爲に、國際聯盟に對する亞細亞聯盟の結成せらるゝ機運は必然的に生じて來るであらう。その前提として少くとも亞細亞聯盟結成への過程として、我等は先づ青年聯盟の生れたことを衷心悦ばねばならぬ。（八、八、一七）

# 滿洲事變記念日

自分は曾て歴史を回顧することは明日への建設に對する用意であり、飛躍の一歩であると云ふことを書いたことがある。歴史文化の回想は、常時の國際社會を知ると云ふことよりも、現在及び將來に於ける文化的因果の過程を知り、且つ國家の發展と動向とを豫見的に窺知し得るところに意義を發見する。今日は昨日の延長であると云ふ消極的な意義ではない、昨日を知ることに於て今日に處すると云ふ省察的な積極的意義を有することに於てのみ歴史の記憶を再認することの重大なる使命があると云はねばならぬと思ふ。そのことたるや敢て國家社會のみに限られることでなく、個人生活に於ても亦昨日の我を顧みて今日の我を活かすと云ふ省察的生活が、必要缺くべからざることは勿論である。

九月十八日は滿洲事變の勃發した記念日である。二年前の九月十八日、此の日の事變を導火線として、滿洲國の獨立となり帝國の滿洲國承認となり國際聯盟からの脱退となり、

孤立日本の非常時の今日に及んだものである。

日滿議定の約命に從つて、皇軍は爾來滿洲の境邊に轉戰又苦戰の義務を遵奉し之が爲多數の將兵を傷け多額の國帑を費消せねばならなかつた。

慌しく此の思出の星霜は過ぎて行く。此の間滿洲國は健全に發達し、今や磐石の基礎は完成して居る。然れども生れ出づる惱みにも增して育ての惱みがある。滿洲國が生れたことを承認した帝國は、ジュネーヴに於て列國から慘々に姑的な惡意地を張られ蹶然脫退した。孤立日本は益々多端に向つて來てゐる。

今吾人は此の經過を顧みて、之等の事實を再認回想すると云ふことは意義が深い。

（八、八、二四）

## 防空演習感

八月九日から三日間に亙り、關東防空演習が防空史空前の大規模の下に施行せられた。帝都は死の都と化し、絢爛燦然たる東京は暗黑街となり、プロペラーの爆音は一種の不安と恐怖を抱かしめた。これは演習に過ぎぬ。若し事實としたら如何、而も斯る空襲が絕對にあり得ないだらうか。爆擊機の全能的航程は約八百哩であるとのことである。之を地理的に隣接假想の敵地からは東西南北何れからも敢行が不可能であることは、その距離の遠さを測定して知ることが出來得る、故に海洋から航空母艦による空襲は……日本の島國としての地理的に不利なる點より觀て、最も可能であり且つ危險がある。實戰的想定の下に行はれた防空演習の效果は、相當の成績を見たと云ふ概評を聞く。

吾人は本演習より敎示せられた空襲日本の危機に、充分なる用意と覺悟とを持たねばならぬと共に、斯る萬一の機會に遭ふ精神訓練を必要とする。（八、八、二四）

## 汗の苦學生

紙芝居の一青年が中等敎員公民科の檢定に合格した。汗を知る者は榮光に輝く、その汗

の價値は千萬兩を以ても購ふことを得ない。汗の眞價は體驗者のみが知る懦夫への清涼劑。（八、八、二四）

## 十年前の九月一日を憶ふ

悲しくも痛ましき大震災九月一日の記念日……今日十年前の思出を回想する。自分は此の時恰も横濱地方裁判所檢事局に於て執務中であつた。午前十一時五十八分、一瞬天地の大鳴動、あつと云ふ間に夢中で屋外に飛出た。咄嗟に自分は治安の事が頭に浮んだ、此の混亂中萬一事が起きることがあつたらどうして拾收せねばならぬか、そんなことを考へてゐるうちに横濱の街は火焔に覆はれて行く、火に追はれて避難して來る群集、火傷を負へる者、大怪我をしてゐる者、子を背負ふ者、病人を抱へた者、老婆の手を引く者、救を呼ぶ聲、助を乞ふ聲、死する者、半死半生の瀕死者、嗚呼、阿鼻叫喚此の世ながらの地獄を見ねばならなかつた。その悽慘なりしを思うて幾度かペンをおいて吐息をつく。

正午神戸に出帆の豫定だつた大阪商船のパリス丸は、避難民の救助を開始した。子供年寄を先に！誰云ふとなく各自が叫んでゐた。火の手は追ひ捲つて來る此の中に、整然と、秩序良く一人一人救助されてゐる樣を見てゐると、此の人達は、日本人は、こんなに偉かつたのか、嬉しいことだと熱い涙が流れて來た。

石油タンクが破裂し油が海上に流れて、それが盛に燃え出して文字通り火の海と化し來るので、我等の船は沖合に去らねばならなかつた。悽慘な夜の帳は降されて陸上の叫喚は波に混つて聞へて來る、遙かに東京、横須賀の方面にも炎々と魔の焰が上つてゐる。どうなることだと氣を揉んでも施すべき術もない。

疲勞と空腹、誰でもが一粒の飯を爭ふ時であつた。二日目に炊出しがあつて、貴重なにぎり飯が一つづゝ渡された。我先を爭ふ樣が想像されるだらうが、事實は全くこれに反して子供や年寄へ先に順々に渡された、ルンペンの一人が自分の分前の半分を、何處の子か知らぬ者に『坊やお上り、小父ちやんは大人だから食べずに我慢するよ』と云つて與へて

ゐた風景なども、感激した一事實として頭に浮んで來る。

一人でも多くの生命を救はねばならぬ、自分に迫つてゐる危險を忘れて、そこにも此處にも涙ぐましい美談の事實を見ながら、斯る非常の場合にかうした氣持を我等の何處に持つてゐたのか、滾然として自然の儘に表顯してゐるのを如實に眺めて、我人と共に感謝せずに居られなかつた。此の心、此の力は、見よ今日の大復興を爲し得た源である。

顧みてその災禍は、未曾有の天災であつたけれど、爲に國民精神の作興に精神的基礎を作つた十年前の九月一日、色々な意味に於て思出も感慨もそして又意義も深いものがある。

今日は初秋の空高く蒼く、庭前の樹葉風に搖られて何かしら哀愁の心が湧いて來る、切實にその日を思ひ浮べつゝ筆を擱く。（八、九、七）

## 南米へ海外へ

人口問題は日本の現在にとつて由々しい大問題である。これを解決するのには移住政策を確立する方法よりない情勢で、曩にも關東軍特務部に於て日本人の移住地を建立するために、南滿鐵道沿線地を精査してその結果相當に良適地帶が發見され、日本內地人の大量家族移民を爲さしむる計畫が行はれてゐると云ふことであつたが、此の時ブラジルからの私設某外交官が商用を兼ねて來朝して齎らした、ブラジル綿花栽培の爲の移民が實現されることにでもなつたら、大いに日本人の奮起を希うて止まないところだ。骨を埋むる豈墳墓の地のみを期せんやである。兎角日本人は生れた土地を死に場所に考へて居るようだ。心細い限りである。

今春四月、大雄飛の壯圖を抱いてブラジルに渡航した日本高等拓殖學校卒業生へ、花嫁船を仕立て同校教諭木野逸作氏が鹿島立ちしたとの記事が最近の新聞にあつたが、その花嫁の中に僅か十七歳の一少女がある。丈夫再び還らず……と遙々太平洋を越えて行く此の健氣な少女……女丈夫……此の意氣は雄々しく華々しい。

人間到るところ靑山あり。若き多くの先覺者に依つて、ブラジル或は滿洲等に日本人の

樂土を建設せられんことを衷心期待して止まぬ。（八、九、二八）

## 秋宵雑感

もう秋も半ば。

桐一葉落ちて天下の秋を知る……と片桐且元の如き英傑でも哀愁と感傷とをそゝられて豊臣の天下の明日の凋落を淋しく歎いた。……況んや我々凡人に於てをや、現下日本は……左翼だ、右翼だ、テロだ等非常時だとはこんなにも目苦しい事ばかりなければならないのだらうか。斯る事態の勃然としてある限り、國民の注意の焦點がヒントを合せてゐない證據であると云へる。世態を靜觀すれば尙火中の厄を脱し得ざる日本の今日である。

靜かな夜だ。庭前の叢に虫の聲を聞き、仰いで仲秋の月を眺め、秋の姿にも增す哀傷の我が心、交々千慮の惱みに此の夜も亦更けたらしく凉氣さへ身にしみて來る。

今宵我が目に映る物は何と靜かなる、物ばかりだ。わが目に映る此の靜寂な姿、……平和な物象……然し我が心に浮ぶ我等の社會は、人間の世帶は、この姿、この眺に似たものを何處にか見出され得よう、思へば轉た心淋しいことである。此の秋宵に際し我々は靜かに國家を考へ自分自身を考へようではないか。（八、九、二八）

## 收穫の秋

豊作だ、鎭守の祭も賑うて笛や太鼓の踊も過ぎた、今日の取入收穫の秋、野良の人々の滿悅さは想像以上のものがあらう。けれども此の喜びは、春は三春の行樂を忘れて、引水の苦しみを嘗め、夏は灼熱の太陽と戰うて三旬の除草に汗を拭き、實に朝に星を戴きて夕に月影を踏んで働いた勞苦に酬いられた喜びである。

花に嵐、月に雲のたとへ、實る秋への日までには風雨に會うた辛苦をどうして忘れられようか。（八、一〇、五）

# 努力の人々

人生は向上への努力の連鎖である。私はこのことを曩に幾度も述べた。今日の自分よりは、より大なる明日の自分を建設する爲に、明日の自分は明後日の自分への向上を志してゐるものである。であるから我々の一生は努力に始つて努力に終るべきである。

伊能忠敬が五十にして學に志した事は有名な話だ。修むるは學ぶにあり、學ぶは何ぞ老幼の別あらんやである。十年對壁の悟を得たる達磨大師、三十五歳にして悟道の曉に醒めたる釋迦、悉く筆舌の及ばざる努力への精進の賜であらう。されば名を後世に成せし人々は、その成れる日に成りたるに非ずして、げにやその成すべき日までに努力した賜だ。

小野道風が垂柳に飛びつく蛙の努力を見て、手習の發奮をした事なども子供の頃に知つた印象深い話である。

自ら光を發する物は、自ら滅する努力が要る、臘燭は自らの身を滅して光を放つ、我等と雖も亦斯くの如くあるべきで、自ら成さんとするものは我が身を粉骨碎身しての努力が要るのも宜なるかなである。

努力の人々として、四十六歳にして夜學小學校を卒へた婦人、女中奉公の餘暇に同じく小學の課程を卒へた女性、二十六歳にして苦學力行外交官試驗に見事榮冠を獲ち得たる朝鮮の張君等、吾人の手本として仰ぐ人々の記事を見て、感心すると共に大いに發奮せしめらるゝものがある。（八、一〇、五）

## 長谷川君のこと

時とすれば人心浮薄の歎きを聞く此の頃、病軀に鞭打ちて應召した長谷川君の義務觀念に痛ましくも大なる感激を覺えずには居られない。彼は不幸にして病歿せられたけれど、その魂魄は尙生きて忠誠の師表たらん

西歐文明の齎した思想が極端なる利己主義の人々を生んで來てゐる時だ。自分があるの

みて、社會國家に對する義務などは忘れかけられてゐるのみか、却つて忌避する者さへある時だ、斯る世相に心ある者をして慨歎せしめてゐるやうな時に、長谷川君のこの美談を聞いて、私は心を強ふした一人である。

君は病に闘つて義務に死んだ、營舍に轉び込んだ意氣は君の尊い軍人精神の表れだ。斯る精神こそ一兵起てば千軍を怖れざる日本魂である。瞑目して君の靈を弔ふ。

（八、一〇、五）

## 名月に題す

仲秋の名月、普く皓然として六合に滿つ、蒼空の涯、神秘の感傷を滾湧せしめて觀月の宵は靜に更けて行く。

明月やあゝ明月や明月や

玲瓏の月の眺は人をして崇高なる感を抱かしむる。

我等は偉大なる自然を通じ、或は偉大なる人を介し、又或は宏遠無限の神秘を仰いで常に深い印象を受けてゐる。印象的生活の必要は今更云ふを俟たぬ、殊に此の大自然を通じて受くる印象の力は大きい。幾千萬年の昔より此の宵、此の名月には變りがないが、之を觀、之に印象を受けた下界の人は移り變つて、歴史を古く物語つて、今宵も名月は照々と明るく輝いてゐる。

此の名月を仰いで幼き童の心境や如何、空に魅せられ神秘に憧るゝ童心は無垢で氣高く此の月にも增さる明るさであらう。

斯くの如くして刻さるゝ印象、そして育くまるゝ情操こそ望ましく賴母しいことだ。

（八、一〇、一二）

## 野球リーグ戰

東京大學リーグ戰は、春に甚しく不振であつた。明大の今シーズンに於ける猛然たる擡

頭により覇權の行方は混沌として來た。然し我等は野球の興味を覇權の何れに歸趨するかに持つものではない。

紺碧の空、熱球の白線を延いて飛ぶところ、若人の胸を轟かせて力の限り奮戰し、精根を盡して斃れて後止むの意氣を以てプレーをする氣魄を愛好して止まぬものだ。

只一個の球の行方に、數萬數十萬の心を集めて聊かの邪念を挾さまず……力の戰をする者これを觀る者等、精神を自ら統制してゐるところにスポーツの價値があると思ふ。プレーをする選手の心身の鍛煉になるのみでなく、之を觀戰するファンの精神統一にも色々と影響を及ぼして益してゐることは爭はれない。

故に野球を觀ること、或は他のスポーツのファンになることは決して惡いことではない。大いに觀戰ファンになるもよいことだ。（八、一〇、一二）

## 兒童の心境

私は時々思出したやうに錢湯屋に行くことがある。裸になつた浴客の語る雜話の中に、私は豫期しない事柄を見たり聞いたりして、非常に得る場合が少くない。勞働者或は子供はそれ並の內容の話だが、それでゐて仲々面白いことを語つてゐる。

或時だ、私の傍らに十三四歳の子とその父とが、小桶を中にして相向ひ合つて洗つてゐた。子供は小學校の五六年生であらう。そして、その父は凡そ無學であつたらしい。子供はその父に對して非常時日本と云ふことを話してゐた。學校の先生が話して聞かしてゐるかも知れないが、此の子の意見は一通り纏つてゐたし、國際聯盟脫退だとか、滿洲國問題だとか對支問題だとか云ふ言葉がその話の中に出てゐた。結局此の頃新聞で云つてゐる荒木陸相の戰爭不可避論と同樣に、その時の子供の意見の結論も一つであつた。

『戰爭になつたら父さんはどうするか』

と父が問はれた。

『どうにもしようがないや、父さんは兵隊ぢやないから、鐵砲を擔いで行けやしないだ

らう』

『戰爭つて、兵隊さんばかりでするもんぢやないよ』

『それはそうさ、馬だつて、犬だつてそれから傳書鳩だつて使はるゝさ』

『そんなことぢやないんだよ』

『ぢや、どうだつて云ふんだ』

『弘安四年に元寇の攻めて來た時を知つてるかへ』

『そんな詳しいことを父さん知つてる譯がないぢやないか』

『歷史を知らないのかへ』

『くはしいことは知らないよ』

『ぢや僕父さんに敎へようか』

『うむ』

父は自分の無學などを氣にしてゐなかつた。それよりは、かうしてませた話をして聞かす子供のことを誇り顏に見えた。

日本は未だ曾て外敵に辱かしめられたことはない。元寇の亂の時でも、あんなに國中が亂れかゝつてゐた時だつたが、元寇來襲で國民は一致協力した。それに神風が吹いて天祐もあつた。日淸、日露の戰爭で勝つたのも實に國民の協力一致と、勇敢な軍隊が發揮した大和魂の發露の結果であつた。戰爭は兵隊ばかりに任せられない。國民は各々の自分の職業に一生懸命に忠實に働かねばならぬ。小學校の兒童は一生懸命に勉强して偉くならねばならぬさうして初めて他國のどこにも負けることのない强い日本になれる。……富とか財とか或は國の大小には何の關係はない、國民の心の一致と大和魂の發露にある……と云ふのだつた。

先生の言葉がこの子供の全部に、そのまゝ映つてゐることに私は氣がついた。純眞無垢鏡の如き童心を尊いとは思はないか。大人ももう一度かうした童心に立歸らねばならないのではないか。子供等に一大敎訓を敎へられてゐる。（八、一〇、二六）

# 外人の見た日本

軍事、外交、經濟等凡ゆる意味に於て我が國は非常時に當面してゐる。國際關係は、世界平和を念とし外交手段によつてわが方針の貫徹を計ること。國防に關しては、他國よりの脅威を受けず外侮を蒙ることなきを期すると共に、わが國力に調和せしむるに留意すること。これが全國民の神經を集中して、數回に亙つて開かれた五相會議の結論的聲明としての表はれだ。

非常時日本の國策大綱はこゝに確立せられたのである。緊張又緊張、國民は全神經を尖鋭化されつゝ國防外交に一段の努力を以て邁進せねばならなくなつた事實は、明かに切實に逼迫してゐる。斯くの如き情勢にある今日、在留外人は、如何に日本を見、如何なることを考へてゐるかに關心を持つことは、決して無意味なことではない。私はこの意味に於て去る十月二十日夜のAK第二放送の計畫に感謝の意を表さねばならぬ。當夜マイクを通じて話された外人の中に、特にウイルヘルム・ダンデルト氏の、『私の見た日本國民性の變移』と題されたお話に最も感動せしめられるものがあつたと同時に、非常に反省を促され刺戟を與へられたものがあつた。

日本人は、その獨特な國民的高價な思想を、歐洲大戰に、英米のデモクラシーに共鳴し腕を組んで欣然として參加した頃を楔機として、その最も堅固にして崇高なる武士道的、國華的精神を漸次喪失し、之に代つて、個人主義的思想マルクス主義等が蔓延し、今や日本の現在は、之等の焰が燃上つてゐる噴火口上に亂舞してゐる姿である。外から攻め來る敵に對しては防禦も出來ようし、又日本の歴史ではそれを完全に爲し遂げて來たのだが、内から擡頭し侵蝕しつゝある此の大敵に對しては、如何なる防禦をせねばならぬかが日本の最大の危險であると共に急務であらう。自分は一言にして答へ得る、即ち武士道的日本精神の再認識、日本人は再び眞の日本人に還すべし、模倣的日本より獨創日本に還るにあり……と云ふのであつた。蓋し適評であり眞實である。

我等はこれを知らなかつたのではない、この事は既に先覺者の絶叫し來りたるところであつたが、非常時に際しても尙、一外人に日本人の進路を指摘せられなければならぬ程に、その反省と自覺とが爲されてゐないことは大いに顧みなければならぬ。

ケマルパシヤが、眞にトルコ人のトルコを建設するものは、トルコ人以外にないと云ふ意味のことを云はれた。

凡ゆる階級、老若男女を問ふことなく、此の日、此の時、非常時日本の爲に起たねばならぬ。私は日本人の日本を建設する者は日本人より外にないと思ふ。（八、一一、二）

## 明治節に際し

明治大帝が神去り給ひてから、早くも二十有二年になる。然しながら私達は今尙大帝の在すように感ぜられ、特に現下の非常時に遭遇して、大帝を景仰敬慕申上ぐる念が新なるものがある。

私の知人に曾て西比利亞に出征した人がゐる。此の人から聞いたことであるが、大帝の御稜威が西比利亞の隅にまで及ばせられ給ふたことに就いて、深く其の御稜威を偲び奉つたのであるが、今日は明治節の佳き日であるから、その話を書いて再び大帝の聖跡を仰ぎ偲ぶことにしたい。

我が出征部隊がバルチザン掃滅の爲に北へ北へと進擊して行つた。四月の半であり此の頃は西比利亞は解雪期で、日中は泥路水雪の曠い原を幾十里も行軍し、夜は附近の部落に陣營して明日を待たねばならなかつた。この頃でも夜になると零下十五度の寒氣に襲はれるので、我が兵士の苦心はまことに筆舌も及ばないものがあつた。それはともかく、或時ルマノフカと云ふ小さい部落に入つて二三日バルチザンの後退の模樣を調査し、或は塹壕と云ふほどのものではなかつたが一寸陣地を構築したりする爲に、此の村に駐ることになつたのであつた。此の村に我が部隊が入ると、間もなく老婆が一人の日本兵の手を引張つて、頻りに何事か云うてゐる、何事かと思つて手眞似足眞似をしながら語合つて見ると、

此の老婆は自分の家へ是非宿つて呉れろと云ふことである。何故さう親切にして呉れるのかは誰も判らない、兎に角二三人で行つて見ようと云ふことになり、私の知人もこれ等の人と一緒に婆さんの家へ行つたのである。案内せられた部屋は、綺麗に片づけてゐた。然も此の部屋の壁に、畏くも明治大帝の御尊影を掲揚し奉つてある。いよ〳〵譯が判らなくなつた。と云ふのは、此の邊一帶はバルチザンを怖れて、日本兵に宿を貸したことなどがわかると、後から慘々な目に遭はさるゝことがあるので、日本兵に對しては心で感謝してゐても、外見は頗る冷淡にしてゐたからである。甚しいのになると、日本兵が行くと門を閉めたり、戸を閉めたりさへしたものがゐた位であつた。それなのに、これは又一體どう云ふ譯か、我々を招じ入れて歡待をする……然も大帝の御尊影を祀つてゐる……不思議だと思ふのも無理はない。苦心して聞いたところ、此の婆さんの夫は、日露戰爭の時に捕虜となり日本に送られた人、日本の軍隊や國民の親切さに沁々と感謝してゐるのであり、自分の夫が無事に歸還したのは、一に大帝の大御心の有難きお蔭に外ならぬ。日本　天皇陛下偉いある……かう云つて、ペーチカの前で十字を切つた老人こそは昔の勇士、婆さんの夫であつたのである。

一同は今更乍ら大帝の御稜威の偉大さが……此の西比利亞の曠野の一僻村にまで及び給うてゐることを知りて、有難き限りであつた。と、云ふのであつた。

明治節の佳き日に私は此の話を思ひ出して、謹んで大帝を偲び奉ることにする。

（八、一一、九）

## 國民精神作興

大正十二年十一月十日、畏くも先帝陛下が國民精神作興の大詔を煥發せられてより、本日を以て滿十周年に當る。

此の間慌しい事象に追はれ乍ら、一昨年の滿洲事變の勃發次で聯盟の脱退等により、一層國民の緊張を要する所謂非常時に遭遇した。今我等は事情を靜觀し、轉じて國外との間に修交の推移變調の狀態を眺望する時、誰か國家の前途を憂へざるものあらん哉である。

此の時に際して、國民が尙惰眠を貪るに於ては、畏くも大詔の精神にもとるのみならず、宸襟遊ばされ給ふ大御心に副ひ奉らざる不忠の極みと云はねばならない。

顧みれば我等は久しく祖國日本の精華を、傳來の文化の絢爛さとその技巧的なる風物とに眩暈を感じながら、或は陶醉し且は耽溺して忘却してゐた憾みがある。我等は敢て西歐の文化が我が日本の發展を阻害したと云ふのではない。その影響は我等の文化開發に大なる啓蒙の因を爲したることは勿論言ふに及ばぬ。啓蒙の因となりたることは之を認むるも、これが爲に失はれたる犧牲は必ずしも尠しとせぬ感がある。我等は日本の眞實なる姿を遠ざかりつゝある記憶から、喚起せねばならないのだ。

何が眞の日本の姿か、此の問自體にさへ、明確なる意義を發見する能はざる徒輩がありはしないだらうか、斯る人々は速に再び日本史を繙いて、日本の實體を再認識せねばならない。

滾然として眞日本の噴湧するものを、日本史の中から發見し得ない人は、日本人としてあり得ないことを確信する。國民が眞の日本の實體を把握することに於て、國家の今日を顧みることが出來る。日本の日本たる所以を知らざるものが、今日の日本を批判出來ないではないか。昨日の日本を知るに於て今日の日本を批評し、今日の日本を昨日の日本に顧みて、茲に始めて明日の日本建設の大業が出來ると云ふものだ。

先づ我等は過去の日本を知ることが肝要であり、過去の日本を知ることに於て眞の日本を認識し、而して今日の日本を批判して明日に備へねばならないのである。風潮の流るゝまゝに船を放棄するに忍びない。國民精神の作興と喚起とに俟つて、我等の日本船は彼岸に向つて舵をとらねばならないのだ。

斯くしてこそ大詔の聖旨に副ひ奉ることが出來る。

國家興隆の基礎は國民精神の剛健にあり……と宣はせられ給ふこそ、畏くも懼れ多き極みであり、聖旨を奉體して協戮一致、國家興隆の成果を擧げねばならぬ。

（八、一一、一六）

# 田耕の人

人間は凡そ働くべく生れ來たものである。働くことを忌み嫌つて、勞働するものを卑下視した時代もある。小人閑居して不善を敢て爲す徒輩は、今も昔も變らないが、働く人々に對する尊敬の念は、封建的な考へ方をしてゐた昔と全く變つて來た。それは各自の生業を對等に認識し、社會的機構の必須的要素として、働く人殊に勞働者の重要な地位を、確然と認めらるゝやうになつて來たからである。勞働者の向上的發展と人格陶冶と云ふ主觀的な自覺もさることながら、社會は勞働そのものゝ必要性と價値とを充分認めさせられて來たからである。

土を耕す者を土百姓と云つて嘲笑的に考へてゐた。然し豐葦原の瑞穗國は農を以て國家の大本として來たのではないか。農業立國として日本は、農村を顧みることに誠意を忘れてゐた感がある。されば今日萎縮しつゝある農村を救へと叫ばるゝに至つたことは、寧ろその餘りに遲かつた憾があるとさへ思ふのである。

土を友に野良に耕作する農民の辛苦は、繪畫的對象の平和な姿ではなかつたか。

我等は農民の勞苦を顧みて、一粒の米に彼等が精魂の結晶なることの吟味を忘れられないのではないか。彼等の健全なる限り我等の日本は健在であらう。（八、一一、二三）

# 親子の情

戯れに母を背負ひてその餘り輕きに泣きて三歩あゆまず

啄木の歌である。この心を歌にし得ることは、啄木でなければ出來ないことかも知れぬ。けれども母を思ふ心は啄木と我等と變つてゐるとは思へない。人として母を愛さぬ者がゐない筈だと信じてゐるからである。

吉田松陰は憂國の志士として、一日として私を顧みる日がなかつた。君國の爲に悠々たり何ぞ生命惜しむことあらむとの心情は全身に燃えてゐた。此の人が斷頭臺上に此の世の

限りに殘した歌がある。

親思ふ心にまさる親心
今日のおとづれ何ときくらむ

人間としての情緒纏綿たるものがあるではないか。親思ふ心は、英雄でも或は凡俗な社會の小さい貧しい人に於てでも變る筈がない。家貧うして孝子出づるのたとへ、却つて親子の情愛は貧しき階級の人々に多い位だ。

此の間私は圓タクを拾つた時その運轉手が語つた。わたしや一生懸命働いて、せめて子供だけは苦勞をさせたくないようにと思つてゐます。親爺は子供の拔殼だつて云つてゐますが、拔殼でもなんでも、親の持つ子供への愛を滿足に注ぐことの出來るのは親になつてゐる賜なんでね。』私は嬉しかつた。かうした愛の懷に抱かれることの出來る子供の仕合せを思つた。そして此の人の滿足さうな言ひ振りに、幸福を祝福して來た。

親はかうして子を思ひ、子は親を慕ふことは我國の淳風美俗であり、此の淳風美俗は國家の大なる礎石である。（八、一一、二三）



## 愛の心

圓らかな童心を傷つけたくないと惱んだ恩師の愛情に、當時罪を他人に轉嫁して、爾來小さい良心の呵責に遭ひ乍ら苦惱の幾年を得て、十八少年が改悛したと云ふ記事を見た。

師の喜びは之に過ぐるものがないであらうし、私は此の少年の悔悟の態度に限りない尊敬を拂ふものである。寛容の胸に抱かれて、愛の懷に撫育せらるゝ者の幸福、それは育ての人と共に滿足の極みであらう。一度過つて之を再びせしめず、罪を憎みて人を愛す、これは獨り教育者の占有すべき德育でなく、如何なる人にも必要なことでなければならぬ。

罪を改めさすことは至難なことである。昔は罪に報ゆるに復仇を以てせしめた場合があつた。然し復仇は更に一つの罪を犯すことである。そこに何等の批判性も反省もなく、從つて罪の人をして改過遷善なさしめ、或は改悛等の機會を與へてゐない。

汝の敵を愛せよとキリストが說いてゐる。愛は同情であり、憫情の總和である。同情を失ひ憫情を以て臨むことなくして、愛の敎育は出來得ないのである。愛は傳心する。先づ自らを愛することが必要である。自ら圓らかな良心を以て微笑まねばならない。愛は滾湧するものでなければならぬ。揑造する愛は外殼だけの柔和を見せるだけで、眞心の中心が缺けてゐるから直ちに滅失する。眞の愛は永久的であり、力である。

我自らを愛することは以て隣人を愛する前提である。所謂僞善は自らを愛せずして欺くものである。燃え上るローソクは、焰を吐く爲に自ら消えて行く、己を滅して行く無我の姿にも似てゐるではないか。我を愛することによつて我を僞らざることによつて、茲に始めて人を愛することが出來るのである。互に異なつた心と心、この二つの心が一つとなる。言は易くして難からずやと思ふことであるが然らずである。

夫婦の愛、親子の愛、親友の愛、悉く我等はこの事實を見ることが出來るではないか。夫婦の愛に僞りが存して、偕老同穴の生活を送られる筈はない。親子の間に虛僞を藏して世にも麗はしい孝道美談の生れやう譯はない。友情に欺瞞あつて、ピチユスとダモンの友情愛を見ることはない。愛は凡ての力であり、根源である。

愛を人生社會の源泉に求め得てこそ、人の和社會の秩序が望まれる。（八、一二、一四）

## 歲末隨感

又しても今年は暮れんとしてゐる。慌しい思出であつた。永劫から無限に流れて行く歲月に、我々の小さい人生の足跡を、瞬間的存在としての歷史を殘してゐるのだと考へると何となく心細い感じがないでもない。然しそんな現在と緣遠いことを考へると云ふことは、餘りにも非現實的な、そして又感傷的なことで感心したことではない。

歲末に際して先づ第一に、自己の經て來し三百六十五日を反省して見たい。去年のそれと幾何の進步向上があつたのだか、或は又斯かる點に於ては却つて退步したのだとか、總決算的に回顧せねばならない。去年のことを顧みて今年の行跡を振返ると云ふことは、我々

が來年を迎ふる爲に最も必要なことである。個人の進歩は社會の向上であるし、社會の向上は國家の進歩であるからである。

又第二には我等の國家に就いて、回想せねばならない。このことは獨り個人の問題でないだけに、その經過と將來とに就いては緊密に關心を注いで、明日の國家建設に注意を怠つてはならない。

個人の進歩は社會の向上であり、社會の向上は國家の進歩であると先に述べてゐるが、斯くして發展したる國家であつたにもせよ、その發展が此の頃のやうに、不當に他國の干渉を受け牽制を受けさせられる所謂非常時に於ては、國家の由々しい問題である。我等は我等の國家の隆昌と共に、いよ〳〵繁榮して行くことが出來るからである。

多端なる昭和八年なりしを想ふ、ジュネーヴに於いて敢然脱退の快擧を決行し、名譽の孤立を止むなく爲さしめられた日本である。それから後に起つた國際問題は、迂餘曲折して難關に次ぐに難關を重ねてゐるのではないか、日印會商或は世界的日本品に對する彈壓、聯盟規約を以て經濟封鎖を受けなかつたからとて、我が對外貿易の受けつゝある影響は決して樂觀を許されない現狀である。

リトヴイノフと米大統領の會見は、米露十六年間修交の堰の水門を開けて米國の露國承認となつて表はれた。問題は單に米露修交の儀禮的復活に止まらず、その後に來る或威力が果して我が日本にどう影響するか、そして又ドイツの聯盟脱退問題等、世界の目まぐるしい動きを注視して行かねばならない等、國家の歳末回想は此の點に於て重且つ大なる意義が存するものであると思ふ。

我等は此の歳末に際して上下一致、官民協力以て明年の輝しい日本を迎へねばならぬ。越年の巖頭に立つて、諸君と共に昭和八年を靜思回想したいと思ふ。（八、一二、二一）

## 年頭所感

愈々昭和九年となつた。瑞氣靄靄たる中に、緊張を感ずるものがある。

建國二千五百九十四年、皇統連綿たる皇室を仰ぎ、世界無比の國體を壽ぐことの出來得たる國民の欣びは、これより大なるものはない。旭光燦々たるに似て又國家の隆昌を見ることは、更に吾人をして力強き喜びを增す。

我等この欣幸の迎春に際し、近時稍もすれば弛緩しつゝあるに非ざるかを思はしむる日本精神、即ち皇道精神の喚起を忘れてはならない。

今や現下の國情は、その對外的關係に於て又國內的事情に於ても決して平穩の時代ではないことに氣がつく。斯る場合に於て此の國難的時代を打開して行く唯一の方法は、國民が一致協力せねばならぬことは云ふまでもないが、この國民が一致協力すると云ふことは、即ち全國民が眞の日本人として特有の皇道精神を喚び起してこそ始めて望まるゝことである。

歷史の古いことが誇り得られるとすれば、それは歷史を古くし得たりし日本精神の誇りでなくて何であらう。この日本精神こそは、建國の始より永遠的の感情であり、永遠的の感情は國民の信仰であり……信仰は結局偉大なる精神力であり……延いて國家の健存性の强大なる力である

國家の健存性の力は例へば建築に於ける基礎工事であり、この基礎にして若し軟弱不備たらんには、美麗絢爛の殿堂も間もなく崩壞して瓦石累々たるに至るが如きものであり、國民精神の國家消長に關するところ又實に斯くの如きであると云ひ得ると思ふのである。

自分は曩に、トルストイの言葉を借りて國民精神を喚起することが如何に重要であるかを記述した。即ち

クレムリンの宮殿の美觀を賞する人は、その地下に埋沒されてゐる基礎工事の如何に鞏固であるかに氣がつかないであらう。

と云つたトルストイの言葉が、自國民に何を云はんとしたのかは自分は知らぬ、が然しその言葉を借りて之を國家に例へて云へば、國家興隆の基礎は國民であり、國民精神を鞏固なる基礎として建つ國家は、クレムリンの宮殿の如く美觀であり得ると自分は云ひたい

のである。

一九三五――六年は日本の危機であると、色々事實を示して論ずる向も少くない。非常時日本昭和九年の元旦を迎へて、自分は日本精神即ち皇道精神の喚起を全國民に切望したい。（九、一、四）

## 皇太子殿下御降誕

昭和八年十二月二十三日、旭光燦然として瑞色普き朝まだき、九重の奥深く全國民が鶴首待望すること久しかりし御產聲……我等が日嗣の皇子、皇太子殿下御誕生との報を承り欣喜恐惶して萬感胸に迫れるものありき。

皇太子殿下御降誕の御慶びは、今や非常時日本にとりて深遠の意義を御齎せ給ふ點に於て、特に其の喜びを增さしむるものあり、即ち內憂外患寧日なき感あらしめつゝある現下の國情に於て、此の時皇太子殿下御誕生遊ばされしは、全國民の精神力に最も深刻なる畏き御印象を與へさせ給ふことに存す。

見よ、全國民が此の御慶びに醉へるが如き至誠の迸りを、宜なる哉、寔に國難日本の躍進打開を暗示し給ふ象徵の如く、その御降誕を信奉する赤子八千萬が無上の喜びなるを。

爲に國民は國威の發揚に、更に百倍の力を以て一致邁進するを得たる感あり、瑞氣靄々として昭和第九春を迎へ、躍進新日本の力强き一歩を踏み出し、意氣益々盛なるものあるを痛感す。

余は諸君と共に皇國の萬々歲を壽ぎ併せて國運の愈々隆昌ならむことを祈りて止まざる次第なり。

×　×　×

その朝

登廳に先だつて自分は二重橋前に自動車を驅つて走つた。旦那お芽出度う御座いますと先づ圓タクの運轉手から受けた言葉、何だか畏れ多いこと乍自分が祝つて貰つたような氣

になつた。

二重橋前は離杳を極めてゐた。何時もは怖い交通整理の巡査も、今朝は陽に燒けた眞黑い顏に白い齒を出して、ニコ／＼と ゴー・ストップに大童で從事してゐる。人々織るが如く行交うて老若男女……紳士、學生、勞働者と何れも喜色を滿面に浮べてゐる。

此の朝ルンペン街を視察して、日本の强さを始めて知つたと云ふ意味のことを新聞に發表された一外國使臣があつたが、自分は此の雜杳の中に交り乍ら、裸の儘の日本人の眞心を透察することが出來たように思はれて、心强さを一層增したが、外國人が見て驚くことは何の不思議はない。

此の赤誠が、あの九重の奧へ集中されてゐる限り、日本は如何なる場合、如何なる國難に際しても常に無限の力を藏してゐて、これに打勝つことが出來るであらう。

（九、一、一一）



# 梅花を讃ふ

物象悉く冬籠りてその寒冷の爲に萎靡してゐる時、獨り梅花は清廉の誇を忘れずに清爽な姿に咲く、例へば端正なる人の品格と風貌とを思はしむるが如し。梅花は絢爛の美を競ふ櫻花と異なり、清楚の中に氣品を具へ嚴然たる威容を保つ點に於て尊ばるゝものあり。その香ふところも亦自ら高尙にして、例へば聖人傑士が自然に具ふ德光にも等し。清節高く濁俗の世に卓越し、仰げば萬代に德光普く布くに似たる聖者を吾人は此の梅花を通じて渴仰する。

東風吹かば香おこせよ梅の花
　主なしとて春を忘るな

菅公が我が心の獨り淸く梅花の如く庭前の梅にかこちて、又咲く日を念じた心中も實にやとぞ察し得べし。（九、一、一八）

# 忠犬に教へられて

鳩に三枝の禮儀ありと教はつて來た人間、三尺退つて師の影を踏まずと教へられて來た人間、その人間社會は何時の間にか極端な個人主義の蔓延するところとなり、人道主義や倫理道德と云ふようなものが、世相から沒却せられてゐるではないかを苦慮さしてゐる現今である。

感謝、禮節、謙讓、報恩、犧牲と云ふような言葉が、漸次使用せらるべき範圍をせばめられてゐる今の世相だ。吾々人間社會が、美德謙讓の潤ひを失つて、功利主義な冷淡なものになつて來たことは爭はれない。文化の進運は精神的な德操方面を殆ど顧みなかつたことが、唯物觀的な文明の一大缺點であつたことに今更のやうに氣がついて來た。精神文化と人間生活の源泉たる心の喚起は、今漸くにして渴望されてゐる。

十年間その亡き主人の歸るさを、空しく雜沓の中に待ちわびて日々自ら寞れて行くことを忘れてゐたと云ふ、澁谷驛前に起きた忠犬『ハチ公』の記事を見て、その一途に主を慕ふいぢらしい姿を想像して、その犬ながらも主人を思ふ心根を思うて、強く胸を打たるゝものがある。

ハチ公は誰人よりその忠義な行を教へられてゐたか、それは彼が自ら感得してゐた主人の恩を忘れなかつた爲の行爲である。彼には何等の宣傳もない、人を倣つた一の僞善もない、暑さ寒さの十年間一日の如く主人を待つことが、ハチ公に出來ても人間に出來ない人があるのではなからうか、人間が動物より利巧であると云ふことが、感謝、禮節、謙讓、報恩、犧牲の觀念を失ふ事に止るとしたら、我々はハチ公に教はるところのもの大なりと云はねばならぬ。（九、一、一八）

# 高千穗の靈峰に寄せて

建國二千五百九十四年、大日本帝國の紀元節を壽ぐに當つて、一遍の所感を記すること

を得たるは、洵に欣幸に堪へないところである。

宏遠無比なる皇運の御榮彌增して天壤と共に極まりなきことは、下庶民の恐惶慶賀し奉るところであり、益々無窮に亙らせられんことを謹んで祈願し奉る次第である。

此の佳節に際して靜かに現下の日本を觀察すれば、古き歷史の變遷と思合はして感慨な能はざるものがある。素より我等は古きを尊びて新しきを好まざるに非ず、新しきが故に正しからざるものを好まざるに過ぎない。

唯物史觀の蔓延し來るところ、その奔流の堰を止むる術もなく、その赴くが儘に放任し來つた近々七十年の慌しい日本の思想界、今にして顧みて慄然たらざるを得ない。正に巖頭に亂舞してゐた日本であつた。

形式文化の絢爛に眩暈して己を空ふしてゐた日本ではなかつたらうか。西歐の文化を輸入するに當つて、代へ難き高價なる犧牲を拂つてゐたものでなかつたらうか。狂態であつた亂心の體であつた。

併し乍ら糜爛しかゝつた日本の肉體であつたが、その良心は尙血脈と共に生存してゐた。非常時は、此の日本の良心を猛然と喚起せしめたのである。

醉夢七十年の久しさに惜まるゝ日本の生命は、萎縮して行くかの感があつた時、恰も昭和六年九月十八日、滿洲の野に放たれた一發の銃聲に敢然奮起したのである。

永き迷夢から醒めた日本、刮目して首を巡らせば、世界は武裝して我に備へてゐることに驚愕せしめられた。四面楚歌を聞きつゝ、極東日本は今や孤影に戰はざるを得ない時であることに漸く氣がついたのである。

斯くして日本は建國の昔に還元して行く必要があつた。日本は日本に立還らねばならぬ、日本は日本人の日本であることに……創成の昔、建國の日本へ、八千萬の國民は飜然として足下の日本を……今より實に二千五百九十四年の昔、神武天皇が、大和國畝傍山の東南麓に宮居を定めさせられ、寶祚に即かせられ建國の大典を擧げさせ給へる豐蘆原の瑞穗國日本に、甦生せしめなければならない時である。此の建國精神の喚起こそ、皇道日

本に立還る唯一の道である。

國難に次ぐに國難を迎へんとする日本、紀元二千五百九十四年の佳辰に當りて、還元建國日本へを記して所感とすると共に、雲に聳ゆる高千穗の靈峯を仰いで轉た感無量である。（九、二、一五）

## 聖恩無窮

宏大無限の御仁德に渡らせ給ふ

天皇陛下　には去る二月十一日紀元二千五百九十四年の紀元節を卜し、曩に昭和八年十二月二十三日皓々朗々として昇る旭日の瑞祥と共に、皇儲繼宮明仁親王殿下御降誕在らせられ給ふ御懌びを、遍く國民に分たせ給ふ大御心により、特に科人に對し其の御仁慈を垂れ給はせられ、恩赦の詔勅を御渙發あらせ給ふ、御聖旨の有難さに恐懼感激の外なし。

拜察するだに誠に畏れ多き極みなれども

天皇陛下　に在らせられては赤子蒼生にして、過ちて囹圄の人となれる者に對し、深く宸襟を惱ませ給ひ、その憫なる罪人の身の上に對し、御慈悲深き御叡慮を注がせられ給ふことは、萬民只々感泣するのみにして御聖德の程を仰ぎ奉りて、我々國民の深く感銘するところなり。

今や我が國は內憂外患交々至る非常時に當りて、君民一致の實を愈々宣揚し炳として日星の如き國體を想起して、此の國難打開に邁進すべきの秋、此の有難き御聖旨を奉戴して、聖代の惠澤に浴することを得たるは、一に忠誠の道を盡さんことに勵み、二に君民一致の美を濟し、三に我が國體の世界無比なる所以を中外に誇ることにして、その意義は洵に深遠なるものあることを信ぜしむ。

我等は古の何れの御代にありても、無限の御仁慈を以て民草に臨ませられたる、我が皇室の御高恩を忘るゝことを得ざるところにして、斯くの如くにあらせられてこそ實に無窮の皇運は連綿として續かせ給ふ所以なるを思ふ時、我が國體の隆運や又むべなる哉と云は

ざるを得ず

我等は曩に皇儲殿下の御降誕に際して無窮の皇運を祝し奉り、國を擧げて歴史的なる感激の坩堝に浸りたる歡びを忘れられず、その餘醉未だ醒めざるものある今日、茲に又重ねて此の御聖旨を忝ふし奉るは、聖恩の窮るところなきを知ると共に、益々一致協力以て御奉公の念を固からしむるを覺ゆ。

見よや日東帝國の國威は所謂『光は東方より』の言葉の如く、今や大亞細亞の盟主として否世界の盟主として君臨する曙光を見るが如き感あり。東方遙かなる彼方瑞雲たなびくところ太平洋上波浪治り平和の瑞祥を拜するが如く今日も太陽は雲上に昇る。瑞氣宇内に滿てるが如く……我等の喜びは世界平和の喜びとして、萬象は歡喜に躍るが如し。

（九、二、二二）

## 以て範とすべき庭瀬氏の奮闘

百里の道も一歩よりと云ふ古い諺がある。人の出世するのも幾多の艱難辛苦の變遷を經てからであつて、生れ乍らの大臣、大將は居ない。

三十五年にしてその有終の生涯を輝かしつゝ人道に光明を授けて十字架上に逝つたキリストの人間としての、大いなる努力八十五年の生涯を捧げて悟道の終生を、衆生の福祉に貢献し、後光燦として偉大なる名を人類の永遠な記憶に殘してクシナガルの野に遷化した釋迦、これ等聖人の一生は血みどろな努力の連鎖であつた。

高嶺を極めんと欲すれば、一歩から攀らねばならぬ。關白太政大臣秀吉が尾張の一僻村に貧しき百姓の子として生れ、卑しき草覆とりから全國平定の覇業を爲し遂ぐるに至つたのであるが、彼の一生は一朝一夕の努力ではない。一煉瓦職工に過ぎなかつたムツソリーニが伊太利の首相否、世界のムツソリーニとして今日その名を成すに至つたことも、徒に赫々たる名聲をのみ羨まれないことで、彼等の一生は蓋し努力奮闘の血涙記である。

大僧正最初はやはり味噌を摺り

と、云ふ川柳があつた。何人の作か詳でないが、吾人に對する努力向上を暗示教訓した名句と思ふ。

苦學四十年五十七歳にして學位の榮冠を獲ち得たる庭瀬氏の記事を見て、その旺盛な意氣と、燃ゆるが如き研學の精神と、そして奮闘努力に對して大なる敬意を表すると共に、常に顧みて空虛に平々凡々たる自分等にとつて限りない刺戟を與へる。一給仕より博士へ……四十年の奮闘が報いられた喜びはさることながら、撓まざる向上發展への努力こそ今日の輝かしい榮譽を荷ふに至つたものである。

人生は、その個人々々の天賦の世界を極むることに於て目的であり終焉である。個人の世界はその人にのみ限られた寶庫であり、これを開拓することなくんば、遂に永遠に扉を閉鎖したまゝに人生は無爲に終る。

私は敢て大臣たれ、大將たらざるべからず、博士となれと云はんとするものではない。各個の人生を徒に無爲に終らしむること勿れ、撓まざる向上發展努力等ありてこそ、その人に尊き價値があることを知つて貰ひたいのだ。（九、三、一）

## 滿洲帝國を祝して

生れ出づる惱みを深刻に嘗め、滿洲國が誕生してより茲に二年、世界最大の關心を以てその育成の姿を凝視せられ乍ら喧囂騷然たる中に、然も亦列强の疑心暗鬼の間に我等が友邦滿洲國は、康德元年三月一日建國滿二年の記念日を卜し、帝政實施の大典を擧行はせらる。

天意に順はせられ滿洲國の天位に即かせられたる皇帝は、即位の宣勅を下し賜はせられたがその中に畏れ多いこと乍ら、今後の多端なるべき國家の難局に處する御決心を拜して、洵に御英明と御叡智とに感激するの外がない。謂ふまでもなく滿洲國の誕生は五族三千萬民衆の總意に發しこの事たるや實に順天の享意に外ならざるも、敢て滿洲帝國三千萬臣民の懌びに止まらずして東洋平和の爲、世界平和の爲、全世界擧げて壽ぐべきことでな

ければならぬ。

極東の新帝國、燦然として茲に生る。此の儼然たる事實を誰か克く世界史上より拭ひ去るを得ん。歴史は慌しく事實を創成して行く、千歳青史に今日の慶びを止めて、大滿洲帝國は輝かしく發展向上して行くことは、東洋平和の瑞祥たるのみならず、世界永遠の平和の基礎であることを確信する。

謹みて帝政の實施を祝して一言す。（九、三、八）

## 春の流

うらゝな春の光が和かく射し、萬象は生氣を甦へして、長い冬籠りから開放された喜悦を樂しんでゐるかのやうである。小川の水も溫んで、よどみなく流れて行く、岸の邊の桃の花が我がもの顔に咲き狂うて春は朗かに微笑んでゐるではないか。平和な委である。我が心にも冬に似たる日もあり、秋の寂寥を思ふ日もあり、夏の若さに似た潑剌たる日もあらう。然し我等の願ふところの心は春風駘蕩の如きそれである。

變遷定めない人生は、苦行の行程であるから、荒み切つた冬の日のやうな心にもなり、奔馬猪突するが如き分別なさすぎた夏の日のやうな心にもなり、哀愁に充てる人生を眺めて落莫たる思ひに惱む日もあることであらう。凡人の常として、惱みに生くることは又止むを得ないと云つて終へばそれまでのことだ。然し人間は、修養の力によつて、鍛錬の力によつて、常に朗かに春のやうな心になり得るものだ。所謂心頭滅却の哲理に從へば、なごやかに人生の春に生きて行かれるのではなからうか。（九、三、八）

## 『友鶴』殉死者を憶ふ

忠誠の御奉公は、それが軍人たると然らざると將又在朝たると在野たるとによつて變る筈のものではない。君の爲、又國を思ふの心は皆一つである。

明治大帝の御製に畏くも

「友鶴」殉死者を憶ふ

國をおもふみちにふたつはなかりけり
軍の場にたつもたゝぬも

と仰せられたのがあるが洵に懼れ多いことである。

我等は國の爲に殉ずると云ふことを本懷とする豈敢て武人のみならんやであるとは云へ、多くの場合その職責の然らしむるところから殉國の犧牲者に軍人が多い。七生奉公の精神に悲くも悼ましく殉死した遭難『友鶴』の乘務員の如き、平時の演習に際して拂はれた犧牲としては實に大きいものがある。然しながら我等は彼等の忠烈な死際をその遺言によつて知り、武人の本懷を推測して涙なき能はぬものがある。彼等に妻子があつたであらう、又彼等に父母兄弟もあつたであらう、一個の人間としては私の情、彼是と思ひ惱みて纏綿たるものがあつたと思ふ。豫め死を覺悟する者ほど悲壯なものはない。その死を敢て怖るゝが爲ではない。その情を悲み其の決心を思ふとき、誰か衷心同情を禁じられようぞ、何人かよく感謝を禁じられようぞ。

然るに彼等は息苦しい死の苦悶の中にありながら、先づ何を云ひ遺さんとしたるか、刻刻として死が迫つて來る、我今國の爲に死す、何ぞ我が命を惜しまんや、陛下の萬歳、皇國の隆運を祈つて從容として死に就いた跡が書き殘されてゐる。そこに一つの私がない、英靈は猶生きて君國を護るべく武人の面影が躍如としてゐる。感慨無量である。

（九、三、二九）

## 青年日本を讃ふ

ゲーテはその名著ファウストの口をかりて我齡既に西山に傾き餘命幾何もなし、我は名譽も地位も財産も欲せず、只我をして再び精氣潑剌たる青年に還らしめよ、と云ふ意味のことを云つてゐる。既にその名を世界の文壇に成した大文豪と雖も、青年の日を懷しむこと斯くの如くである。

青年を懷しみこれを讃ふる心はゲーテの人生にのみ限られない。一國の消長もその國の

青年の志氣に懸つてゐることは、歴史が雄辯に我等に語つてゐる。大阪毎日新聞主催全國優良青年大會は、三百餘の代表青年を集めて、非常時日本擁護の第一線に起つことを誓つた。その意氣衝天の慨、青年日本の前途を壽ぐと共に、此の力を以て祖國を磐石の上に安んぜしめられんことを期待して止まぬ。（九、三、二九）

## 日米修交八十年

安政元年三月三十日、今より八十年前の今月今日、我が幕府の代表者林大學頭とアメリカの特派使節ペリーとの間に、開國修交の爲に所謂神奈川條約が調印せられた記念の日である。

八十年の歴史を顧み、變遷の跡を回想すれば、慌しい歳月に我が日本の發展と躍進とに我ながら驚くの外はない。鎖國日本は二百五十年の久しい間、内に安泰をむさぼるのみで世界の大勢を知る由もなかつたのであるが、嘉永六年ペリーの率ゐる黒船の來航によつて太平の夢を破られた。

今より考へれば、當時通商開國の時機の遲かつたことに寧ろ驚くのであるが、當時はそれを快からず思ふ者が無かつたのではない。皇土を蝦夷に蹂躙さすを許さないなどと、極端に言論を以て反對した著名の人もゐた。尊王攘夷など喧しいものがあつて、國論も囂然と起つて來たことなど、近世史の新しい我等の記憶である。

然しながら我が國の此の英斷は、今日の大日本を爲すべき基礎的國是であつたことなどを思ふと、當時の先覺者に對して我等は感謝せねばならない。東洋の一小島國日本が、それから八十年の後に今日の大帝國となるであらうとは、ペリーでさへ想像してゐなかつたことであらう。況んや黒船の雄大さに驚いて、山の中に逃れた日本の大部分の國民に於てをやだ。

我等は今日此の記念日を迎へて、修交八十年の日米の國交史を顧みる必要がある。幕末から明治中葉にかけては、アメリカは常に先進國として、その雅量的國策を以て日本に對

してゐた。圓滑であつた。然しながら日露戰爭後に於ける日本の世界的地位、その發展等は世界の注視と驚異の的となつた。一九二四年に至つて遂に日米間に悲しむべき暗影を投じたと云ふのは、所謂移民修正案の實施であつた。爾來本問題は兩國をして互に釋然たらしめずに進んでゐたものである。

大戰後に於ける米國の對支對滿の政策的見地から、意見を我と異にする場合を生じたこともあつたが、近頃は上海事變、滿洲事變、日本の國際聯盟脱退等日滿支を繞る純然たる極東問題に關して、兎角國民的感情を損ひ勝ちの狀態にあるのではないかを一部の人々が考へてゐる。我等は米國を猜疑してはならない。米國は我等を誤解すべきではない。兩國の間、低迷する暗雲あるとすれば甚しき認識の誤りに基因してゐる。

太平洋に跨る東西の二大強國は、今日此の記念日に當つて八十年前の修交の思出を新にし、更に將來の兩國々交上和親協調の基礎を築かねばならないことを痛感する。

（九、四、五）

# 老火の番の殉職

三月の末、例年ならば櫻の噂そろ〳〵傳へられると云ふのに、珍しく帝都一帶に降雪があつた。氣まぐれな低氣壓の徒で、風流人は雪見の宴を催したかも知れないだらうなど思つてゐたが、それから二三日後、その雪の夜に哀れな老火の番が凍死したと云ふ新聞記事を見て、私は獨り暗然たらしめられたのである。

老齡五十九歳の身でありながら、夜警の大切な職務に從事してゐた彼であつたから、私の想像するところでは淋しい餘生に生きてゐて、情實も哀れを語る身の上であらうと思ふ。その彼老火の番は霏々粉々と積る雪の夜を、痛ましい姿で見廻りに出たものである。炬燵に親しみ得る人も絹布の床に包まる人もあるだらうが、然し我等は常に枕を高ふして安眠を貪り得る裏面に、我等に代つてよもすがら忠勤を勵んでゐて呉れる、之等の人々の勞苦を忘れてはならないことである。

翌朝此の忠實なる老火の番が、町内の横小路に於て凍死してゐるのが發見された。彼は雪の中に、兩手で拍子木を抱へるやうにして斃れてゐたと云ふことであつた。私は此の記事を見て涙が出た。

此の間水雷艇『友鶴』の不慮の遭難に際し多くの忠勇なる將兵を犧牲にしたのであるが、彼等が殉死の義烈については曩にその所感を述べたことであるが、此の老火の番の殉職も敢てこの場合と異ならないのではないかと思ふ。自己の職務に斃ると云ふことは名譽と云はねばならぬ、然してその名譽には高價な涙を拂はせらるゝ場合が多い。

内に人は安らかに夢を追ひ、外に萬物は冷凍におびえ、雪は愈々積つて行くその夜を、老爺の火の番が寒さにふるへながら、拍子木を打ち鳴らして歩いてゐることを想像しただけでも我等は滿腔の感謝を捧げねばならぬのではないか。人が見て居ようが居るまいが、彼は十年一日の如く働いて來た。

その夜の寒冷は老體の彼にどんなに辛かつたらうかを思つた。けれども、その爲に彼が尊い公共への奉仕の義務を怠慢に出來ないのであつた。一巡の怠慢によつて假に肉體の勞苦を逃れられ得たとしても、義務を果さなかつたことの良心の呵責によつて苦しさを增す、否若し假にその怠けた時刻に不幸な事件が起きたとしたら、只一巡の怠慢によつて十年の精勵を無にするのみかその責任は許されぬ。

公共の爲に殉職した此の老火の番の死は色々な教訓を我等に與へてゐる。

（九、四、一二）

# 旅

官命を帶て時折は地方へ出張することがある。重要な用務を有してゐるのであるから勿論趣味家の旅行とその趣を異にするのであるが、とは云へ時に寸暇を惜しんで旅情をむさぼる心が起らないではない。旅の空の風物に、珍しさと新しい好奇的感情とをそゝられ

て、人も山水も異様な慕はしさを覺ゆるものがある。況んや史跡を訪れて何千年の昔を偲ぶ感慨に於てをや、一本の古杉に無量の回顧を追ふことも旅の幸で、蕭々と渉る風の音にさへ秘められた懐舊の念を湧發せしめらるゝは、獨り私のみの旅情ではあるまい。

慌しい私生活の屈託から逃れて、一山を越えて異なつた空の空氣を滿喫しただけでも、新鮮な心氣の轉換を禁じられない。我々の生活が複雜するにつれて、緊張した重苦しさを感じて來る。敢て安逸を貪ることの意識があるのでなくとも、何處かに明朗な心の追場を求めたくなるのではないか。人の生活に於ても明日に創生の新生面を求むるところのものは、昨日より今日へそして又明日にと心の旅を意味してゐる。

十年苦節を守ることは、必ずしも尊むべき節義と云ひ得ない場合もある。そこに一歩も進取の氣性なく、退嬰の姿を見るだけのことしかないからである。年々歳々同じ軌道を走つてゐるだけでは、東海道の旅も珍しくなく、汽車の機關手が靈峰富士に一顧をもせずに通過するのと何の變るところがあらう。



心の旅は新しい自我の明日の姿を發見するのに必要である。それは、旅人が異聞の地に來つて心氣を轉換し、新しい情趣に云ひ知れぬ憧憬を覺ゆると同樣に、新生活への道程であり向上する爲の欲求の姿であることを思ふ。

## 二

旅をしながら私は又次のやうなことを考へてゐた。甲州の空から見た富士が、駿河の空より見ゆる富士と違つてゐる。甲州の人と、駿河の人と、富士について言爭ひをしたからとて兩方ともその言分は正しくない筈ではないか。甲州の人は甲州から見た富士以外に富士山がないと思ひ、駿河の空に見ゆる富士は、駿河の人に云はす只一つの富士であることに疑ひを挾まないとするならば、遂に何れも富士を知らざるの謗を免れないことになる。富士山が日本に一つしかない存在であつても、その觀測の地點を異にするに於ては千變萬化の姿である。然し常に富士は一つであり、これを觀る者の地點によつて、秀麗が變じて巖

石の累々たる醜塊に見ゆることもある。

人の心の置きどころに從つて、かうも映像が變るのかと思ふと慄然とする。

（旅から歸つた夜　九、四、一九）

## 櫻の花

春は花、百花咲き亂るゝ中に、獨り櫻の花は日本魂の象徴であると讃へられ、花は櫻木人は武士などゝ特別に賞翫せられ、日本を代表する所謂國花と稱せられてゐる。その色の淡紅にして生色に滿ち、爛漫たる眺は自ら旺盛なる青春の意氣を思はしめ、然も端麗にして侵すべからざる面影あるを思ふ。

朝に爛漫として誇るかと思へば、夕べに落花の舞に無情を惜ませて、例ば武勇の士の華華しき最期を思はしめ、何となく日本國民性に似たるものがある。只美麗を誇るだけのことなら幾千萬の花の數がある中に、獨り櫻を愛撫する理由は乏しいではないか。全山萬朶の櫻、雄健な氣魄を示して志氣を振ふかを思はしめ、明朗なる印象と潑剌さとを我等に與へて呉れる。

洵に櫻は日本の象徴である。旺盛なる國民の志氣を反映して今や滿開の眺、非常時の花は殊更に意義を深めて、爛漫としてゐる。（九、四、二六）

## 再びハチ公のこと

主人の歸るさを十年一日の如く驛頭に待ちわびて、行交ふ人々の同情を集めてゐた忠犬ハチ公の銅像がいよ〳〵竣工し、盛大に除幕式が行はれた。

自分はハチ公の記事を新聞で見てから大いに感ずるところがあつたので、その話を子供に聞かしてやつたことがあつた。純眞な子供は、御伽噺にありさうなこの話に、どんなに か強い感動を覺えてか、一度そのハチ公を見たいなどゝ云つてゐた位で、自分も何時かの機會に見たいと思つてゐたが、四五日前やつとその目的を達した。

話題のハチ公を澁谷驛の雜沓の中に訪ねて見ると、その老衰した姿、そしてその顏、その眼、何處かに物淋しさと愁傷さを思はせて悄然と坐つてゐた。永遠に歸る日のない主人を待つてゐる彼、さう思つて見てゐると、何だか泣いてやりたいような氣がして來た。

犬は三日主人に飼はれて終生その恩を忘れないと聞いてゐる。畜生の犬にして尙斯くの如しである。或雜誌で見た實話の中に、こんな犬の話もあつた。

寢食を共にして可愛がられてゐた少年の主人が洪水の爲に溺死した。それからと云ふものは彼は一食もとらず、可憐なりし主人の墓場について一歩も去らず、程經てから墓場の塚を掘り出して、顏を突込んだ儘死んでゐたと云ふことである。

人間にして恩を忘るゝに於ては、ハチ公等に劣ることになる。恩を忘るゝのみか恩に報ゆるに仇を以てする人間もあるとしたら、人道もうたゝ寒心に堪えないではないか。

（九、四、二六）

## 靖國神社に參拜して

青葉薫る九段丘上まだらな八重櫻を交へて、今日ぞ十二萬八千八十一柱の丹き直き心も家を忘れ、身を擲ち、身罷りし靈を合祀する靖國神社の大祭である。

畏くも　天皇陛下に於かせられては行幸遊ばされ、御親拜の玉串を捧げさせられ此の光榮に浴した四千餘名の遺族の者を感泣せしめられた大御心の御有難さよ。

寒冷の月凍る冬の原に、或は炎熱石を燒く夏の曠野に、轉戰苦鬪を續け、異鄕の空陣營の夢にも、上　陛下に對する忠誠と祖國の爲とを忘れることのない勇士に對し、我等は滿腔の感謝を捧ぐるところである。況んや斯くて彈雨の間に、丈夫再び還らざる譬への如く、名譽の戰死を遂げられたる之等の勇士に對しては、何ぞ忘恩のことあるべけんや。

顧みれば我が日本帝國今日の隆盛を來したる所以は、一に之等忠勇の犧牲者が柱石となつてゐるからである。即ち死して護國の神となり、英靈の尙止つて加護し給ふ賜である。

此の間田舍の新聞で見て大いに感激せしめられたことであるが、、東北の某師團が名譽の凱旋して間もなく或旅團長は、所謂戰塵を拂ふいとまもなく管下の小さい町へ赴かれて、一戰死兵の自宅を訪れた。

『御令息はお國の爲によく働いて下さいました、華々しい戰死を遂げて下すつたが、貴下には何ともお氣毒千萬に堪えません』

と鄭重な挨拶があつた。戰死兵の兩親は只々その有難い言葉に感激してゐるのみであつたが、やがて

『倅がよく死んで呉れたと思ひます。陛下の爲。御國の爲我々一家を代表して、報恩の萬分の一を盡して呉れたことが、何より嬉しいことです。それに靖國神社に祀られて、神樣となつたのですからこれに過ぎた名譽はありません』

と答へられ、旅團長以下居合した人々に深い感動を與へたと云ふことである。

此の親にして、此の勇士あり、此の家にして此の子あり。否八千萬の國民は、悉く斯くあつてこそ、忠勇義烈の兵士が生るる。誰か之を偶然と云はんや。我等は一天萬乘の君に對し奉り、將又日本帝國に對して有してゐる信念的感情は、右我が子の戰死を語る老夫婦のそれと異なつてゐない。

今日之等名譽の戰死者の英靈を祀る靖國神社の前にぬかづいて、私は色々な感慨を覺ゆるものがあつた。歸途參拜者の雜沓の中に揉れ乍ら、日本の强さ、そして日本國民の眞劍さを、非常時の臨時大祭の底の中にはつきり、看取出來たような氣がして嬉しかつた。

（九、五、三）

## 師の愛は麗し

數年前當時靈岸島の小學校長であつた椎名龍德先生が、貧しく歪められた哀れな境遇の兒童等に、滾然として注いだ愛教育の數々の物語りを『生ける悲哀』と題して出版されたことがあつた。先生の撓まざる努力の跡を見て感謝せずにゐられなかつたと共に、救はれた兒童の幸を衷心祝福して止まないものがあつた。私はそれを幾度繰返し耽讀したか知れ

ぬ。物語りの主人公に憫情を捧げ、先生の愛教育とその高德に生ける教範を受けた感動を今も猶忘れられぬ。

私は曩に愛は力であると述べた、二つ以上の魂が抱擁した形、而も一つとなつた心と心の愛であると云ひ、それが如何に強い力であるかを知つたからである。先生とその教へ子との間に咲いた麗はしくも涙ぐましい美談を聞いて感激せずにはゐられなかつた。又一方教へ子の孝養に、家貧うして孝子出づるの古諺を今此の實話の中に發見した。師の滿足は云ふもさらなり、我等は生ける教訓に自ら頭の垂るゝ感を禁ぜられぬ。（九、五、二四）

## 尊き悲壯の犧牲

今朝朝刊の三面を見ると痛ましくも尊き犧牲者、レントゲン療法の泰斗醫學博士宮原立太郎氏の記事があつた。明治四十年初めて我が國にレントゲン療法を輸入した氏は、自らレントゲン光線に侵蝕せられ刻々我が肉體は削られて、今は科學者の生命と賴む右腕上膊の下端からブツリ切斷せられ、病院の一室にこの痛々しき闘を回顧しつゝ呻吟してゐると云ふことである。

然も氏は往訪の記者の問に對して『切つた腕は近く開業する癌研究所に寄贈することにした』と述べたとの由、その態度の堂々たる、まことに敬服措く能はざるものがあるではないか！天職に斃るゝことは人間の本望かも知れぬ、少くとも尊い名譽であるに違ひがない。

科學の力は偉大なる自然を征服して行く、天體の星座から何百何十何ケ月何ケ日何分何秒にして光が我等の地球に到達するとか、何日何時何處に何星が表はるゝとか、神秘とせられた天體の秘密さへ、人智科學の進歩に從つて明確にせられて行く、我等は此の科學の進歩に蒙る恩惠を數限りなく實生活上に應用して來た。けれども、その今日の恩惠を蒙ることを得たる過去に於て先覺者が如何なる尊い犧牲を拂はれて來たかを忘れてはならない。

私は云ふ、過去に於ての此の尊い犧牲を忘るゝ者がゐたとしたならば、今その犧牲となつて倒れつゝあるこの宮原博士を現實に見よと。

人類社會の幸福を徒に貪るは罪惡なり、靜かに之等先覺の尊い犧牲者に對して、その靈に心からの感謝を捧げねばならぬ。（九、五、二四）

## 雜感

大海は清濁をともに併せ呑む、とは偉大なる寛容の形容であらう、人間も斯くありたいものである。心を洋海の如く廣く深く持たねばならぬことが、先づ第一に必要なことである。

世の中の人には顰蹙すべき行爲を敢て爲しながら、世人から爪彈きをされて居ても、恬然として意に介することもなく、づう〳〵しくと云ふか狡猾で鐵面皮に平氣でゐらるゝ者が居る。斯くの如き人に限つて囂々たる非難を受けても、毀譽褒貶を外にして君子たるが如き態度を持ち、反省することのないのは德性的に缺陷のある憐むべき人で、社會的には許されない存在であらう、大いに反省自覺を求めたい人々である。或は謂ふ、我は大海の如く淸濁を併呑す。世人の誹謗を念頭に置かず以て自ら顧みて疚しからざればなりと、誤れること之より大なるはなくその情や悲しむべきである。

世俗に超然として一身の榮譽名聲にこだはることなく、己を正しく持して、照々乎として天日の如く燦然たる偉光を放つて、堂々信念に生きる人であつてこそ、その信念の正しい限り此の人にして始めて毀譽褒貶の外に、脫俗的存在の偉人として仰ぐことが出來るのである。

人は凡そ全からざるが常である。生れ乍らにして神佛の再生したるが如き者は居ない。三界の苦行に修養をして、始めて或段階の人にまで向上出來る。かるが故に、我々人間の社會に、宗教、倫理、道德と云ふ教義が必要になる。而して茲に人生の修養とか向上とかが生れるのである。

敢て神佛が自己を庇護善導する他力的存在であるとは云はない。何となれば自己以外の認識を一個の標識に向けて、他存的に實在を證明することが大きい矛盾であるからである。己の實在が先決的條件である。自己の確認をすることに於て、自己と共に他の存在を認め得るからである。

神佛の前に停立祈願することは他力的庇護を希ふことではなく、自己の心に神佛と共に生きる念願である。修養である。故に自己が正しからざる場合に於て、神佛の庇護がある筈はない。

私は或講演會で、苦しい時の神頼みと云ふ話を聽いて感心したことがあつた。苦しみから逃れたい爲に神佛に祈る者がゐる。その願ひが屆けられなかつた場合には神佛を罵る者がゐる、甚しいのは神體佛像に對して制裁を加へるのがあると云ふのであつた。自己の心に神佛は共に生きることを知らざる寓話設例に過ぎなからうが吟味すべき話である。

（九、五、三一）

# 噫東郷元帥

永劫の時の流れに人生は限られて生を享け、然も既に何時の日にか死すべき運命にあり。王侯將相の區別なく、人力を以て爲すべき術なきを如何にせん。人世斯くの如しとするも獨り我が東郷元帥の絢爛たる武勳と偉大なる人格とは、時と共に未來永劫に傳へらるべし。

東郷元帥の存在は、例へば無限なる星の數の中に、永久に動くことなき北極星の如く赫々たり、之を仰いで人生航路の羅針を定め、俯して彼岸への梶を把る全世界人の目標として燦として輝くが如し。

噫、我等が東郷元帥は遂に薨去せらる、哀惜何をか譬へん、悲しい哉。

巨人再び起つ能はず、元帥病重しとの報全國に傳へられたるは將に五月二十七日、此の時より二十九年前の此の日、世界海戰史上に絶賞惜しまれざる特筆大書すべき、日本海大

海戰の記念日に當り居れりとは、奇しき暗合として歴史の變轉また一入の感慨を思はしむるものあり。

全國民憂愁に沈み、或は深夜神前に水垢離を爲し、或は又一賤夫の妻子が鷄卵七つを持參して邸前に見舞ひ、一勞働少年が僅かの貯蓄を拂下げ餅菓子一圓を捧げて泣きながら駈け込むあり、幾多の感激すべき平癒祈願者の記事に胸を打たれつゝ、全國民の眞心込めたる祈の甲斐ぞなかりしは憾みても餘りあり。然れどもよしや魂魄天に招ぜられたりと雖も、元帥が愛國の靈は所謂非常時日本の加護を忘るゝことやあるべき。

我等は協力一致以て來るべき國難を打破して之に應へざるべからざるなり。徒に哀愁呆然として過さんより、進んで益々各自の業務に勵み國威の發揚に努力することこそ、即ち以て元帥の靈に應ふる道なるべしと信ず。

元帥を失へる悲しみや深し。されど此の時國民は須く冷靜に、明日の國家に關して大計を樹つることを忘却すべからず。失へる力が大なればこと程大なる勇斷を必要とすべき秋にあらざるやを思うて自醒すべきなり。

希くば御靈よ、皇國の興廢今後に近し、偏に御加護を賜りて、我等の熱愛する祖國日本帝國を以て泰山の安きに置かせ給はんことを！

噫、今宵此の一文を草して北天を仰げば、北極星蒼空に冴えて氣品高し、昔凡俗の間には人死して星となると傳へられたることありしとか、今我自ら北極を仰いで偉大なる星を凝視して思ひ交々至る。（九、六、七）

終



# 人生愚感

昭和十四年九月二十日　印刷
昭和十四年十月　十日　發行

定價　壹圓貳拾錢

著者　岡　五　朗
東京市麴町區霞ヶ關一丁目一番地
刑務協會代表者
發行者　大　原　虎　夫
印刷者　山　內　廣　治
横濱市中區筱下町字松本七三一

發行所　刑　務　協　會
東京市麴町區霞ヶ關一丁目一番地